

岸和田市文化賞

第 35 回
濱田青陵賞授賞式

日 時 令和 5 年 9 月 24 日 (日) 午後 1 時
場 所 岸和田市立文化会館 (マドカホール)

岸 和 田 市
岸和田市教育委員会
朝 日 新 聞 社

第 35 回 濱田青陵賞授賞式次第

◇ 表 彰

表彰状・副賞 岸和田市長 永野 耕平

副 賞 朝日新聞編集局長 山浦 一人

◇ 祝 辞 岸和田市議会議長 松本 妙子

◇ 選考経過及び受賞者紹介

濱田青陵賞選考委員長 小林 達雄

◇ 受賞者記念講演

九州大学大学院人文科学研究院准教授 辻田淳一郎

受賞理由 古代鏡の分析による古墳時代を中心とした考古学的研究

記念講演 鏡からみた日本古代国家形成過程の研究

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

◇ 記念シンポジウム

倭の五王の時代を考える

パネリスト（順不同・敬称省略）

九州大学大学院人文科学研究院准教授 辻田淳一郎

早稲田大学文学学術院教授 田中 史生

京都橘大学名誉教授 一瀬 和夫

神戸大学文学部教授 古市 晃

明治大学文学部教授 若狭 徹

司 会

朝日新聞編集委員 中村 俊介

【 箏演奏 】 岡部 雅浪（おかべ まさなみ） 正派大師範

1974 年、正派音楽院音楽科を卒業し、唯是震一氏の門下生となる。75 年、NHK 邦楽育成会卒業。80 年、山田五十鈴主演「しぐれ茶屋おりく」に箏演奏出演。90 年には雅浪会を結成する。91 年、NHK オーディション合格。

05 年には人間国宝 鶴澤友路師と共演するなど、多方面で活躍する。

【 本日の箏曲名 】 「五十鈴川」 作曲 宮城道雄

ご あ い さ つ

「岸和田市文化賞条例」に基づき 1988 年に制定されました「濱田青陵賞」は、考古学とその周辺諸科学の分野で活躍中の研究者を対象とする文化賞です。今回で第 35 回目を迎え九州大学大学院人文科学研究院准教授 辻田淳一郎氏の研究業績に対し贈られることになりました。

ここに授賞のご報告をさせていただくと共に、皆様のご理解と、学界関係各位の多大なるご協力に対し深く感謝申し上げ、本賞が、さらなる学術文化の振興に貢献できるものとなることを祈りつつごあいさついたします。

令和 5 年 9 月 24 日

岸 和 田 市
岸和田市教育委員会
朝 日 新 聞 社

【濱田青陵賞】

濱田青陵賞は、岸和田市にゆかりが深く、我が国考古学の先駆者として偉大な功績を残され、多くの後進を育成された濱田耕作（号 青陵）博士没後 50 年にあたる 1988 年に岸和田市と朝日新聞社が創設しました。

市民の誇りとして博士の業績を称えるとともに、我が国考古学の振興に寄与する目的で、業績のあった新進の研究者や団体を広く選考し表彰するものです。

受賞者には岸和田市より表彰状と副賞、記念盾が、朝日新聞社より副賞が贈られます。



濱田青陵賞受賞者

回 数	氏 名	業 績	受賞当時の所属/職
第1回(1988年)	東 野 治 之	アジアの視点にたつ古代日本文化の研究	大阪大学教養部助教授
第2回(1989年)	都出比呂志	日本農耕社会の成立過程に関する研究	大阪大学文学部教授
第3回(1990年)	小 林 達 雄	縄文文化の総合的研究	國學院大學文学部教授
第4回(1991年)	青 柳 正 規	古代ローマの美術・考古学研究におけるすぐれた業績	東京大学文学部教授
第5回(1992年)	田 中 淡	中国建筑史の研究	京都大学人文研助教授
第6回(1993年)	春 成 秀 爾	原始時代の社会構造とイデオロギーに関する考古学的研究	国立歴史民俗博物館教授
第7回(1994年)	千 田 稔	古代日本の歴史地理学的研究について	奈良女子大学文学部教授
第8回(1995年)	武田佐知子	服装史と日本古代国家の形成についての研究	大阪外国語大学助教授
第9回(1996年)	山 中 敏 史	古代官衙に関する考古学的研究	奈良国立文化財研究所集落遺跡研究室長
第10回(1997度)	菊 池 俊 彦	北の海と大地を視点として	北海道大学文学部教授
第11回(1998年)	甲 元 眞之	東アジア新石器時代社会研究の革新	熊本大学文学部教授
第12回(1999年)	上 原 真 人	瓦と木器から日本の古代を追求する	京都大学大学院教授
第13回(2000年)	岡 村 秀 典	中国・日本の考古学を連携する研究	京都大学人文科学研究所助教授
第14回(2001年)	今 村 啓 爾	縄文文化を中心とした考古学の実証的研究と日本考古学の英文概説書による海外への紹介	東京大学大学院教授
第15回(2002年)	寺 沢 薫	考古学的成果にもとづく王権・国家形成期のすぐれた研究	奈良県教育委員会文化財保存課
第16回(2003年)	宮 本 一 夫	東北アジア文化論とその日本文化への影響の研究	九州大学大学院教授
第17回(2004年)	佐藤洋一郎	DNAを使った新しい考古学の開拓	総合地球環境学研究所教授
第18回(2005年)	中村 慎一	アジア稲作の起源と展開・中国文明の成立をめぐる比較研究	金沢大学文学部助教授
第19回(2006年)	福 永 伸 哉	三角縁神獣鏡と国家形成の研究	大阪大学大学院文学研究科教授
第20回(2007年)	難波 洋三	銅鐸の研究	京都国立博物館学芸課情報管理室室長
第21回(2008年)	関 雄二	古代アンデス文明の形成過程とその特質に関する研究	国立民族学博物館教授・先端人類科学研究部長
第22回(2009年)	村上 恭通	東アジアにおける鉄と国家形成過程との有機的関係を解明した	愛媛大学教授・東アジア古代鉄器文化研究センター長
第23回(2010年)	若狭 徹	古墳時代地域首長とその支配領域の形成過程に関する実証的研究	高崎市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係長
第24回(2011年)	松井 章	日本考古学における動物、環境考古学の確立と国際化	国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長
第25回(2012年)	小畑弘己	東北アジアにおける穀物栽培過程の革新的研究	熊本大学文学部教授
第26回(2013年)	市 大樹	考古学と木簡などの研究を重ね、古代国家の研究を大きく前進させた	大阪大学大学院文学研究科准教授
第27回(2014年)	吉井 秀夫	百済を中心とする朝鮮半島墳墓の研究と古代日朝関係史、朝鮮考古学の研究を進めた	京都大学大学院教授
第28回(2015年)	千田 嘉博	城郭の考古学的研究を新たに開拓し、その確立と発展に寄与	奈良大学学長
第29回(2016年)	下垣 仁志	古墳時代の王権構造の解明に大きく寄与した	京都大学准教授
第30回(2017年)	外村 中	東洋古代の芸術文化の解明に大きく寄与した	ドイツ ヴェルツブルグ大学 東方文化研究所漢学系上級講師

第 31 回（2018 年）	関根 達人	独自の視点と方法により考古学が中世史・近世史に大きく貢献しうることを示した。	弘前大学文学部教授
第 32 回（2019 年）	米田 穰	同位体分析をもちいた考古科学を開拓し、その確立と発展に寄与した	東京大学総合研究博物館教授
第 33 回（2021 年）	河上麻由子	仏教文化の視点による古代東アジアの対外交渉史の研究	大阪大学大学院文学研究科 東洋史学研究室准教授
第 34 回（2022 年）	堀 大介	考古学に立脚した古代地域史像及び白山信仰史の学際的研究	佛教大学歴史学部歴史文化学科教授

「考古学は過去人類の物質的遺物に拠り人類の過去を研究する学」

濱田耕作『通論考古学』

濱田青陵

本名、濱田耕作。1881～1938 年。東京帝国大学文学部（美術史）卒。卒業論文は「希臘的美術の東漸を論ず」。イギリスなど 3 年間のヨーロッパ留学の後、京都帝国大学に日本初の考古学教室を開き、近代的かつ科学的な日本考古学を教えた。国内はもちろん中国、朝鮮での発掘調査も指導・踏査を行い、さらに美術史、建築史、民俗学などにも活動の領域を広げて総合的な学風を樹立した。

また、精巧な模写、俳画に似た洒落たスケッチや旅行記、絶妙な味わいの随筆をたしなみ、温厚な人柄でも知られた。

著書に『通論考古学』、『東洋美術史研究』、『考古学研究』、『百済観音』、『京都帝国大学文学部考古学研究報告』など多数の著書がある。

旧岸和田藩士の父、濱田源十郎氏は、警察官などを経て、朝日新聞社の初代会計課長。また元岸和田藩主岡部長職の三男長挙氏は、朝日新聞創業家の村山家に婿入りしており、村山長挙としてのちに朝日新聞社主となる。長挙自身、京都大学の学生時代に濱田耕作宅に下宿しており、まだ濱田耕作も大学卒業後の一時期、朝日新聞社の美術誌『国華』の執筆、編集者となったことがある。



第 35 回 濱田青陵賞受賞者

受賞者氏名

辻田淳一郎（つじた じゅんいちろう）
九州大学大学院人文科学研究院准教授
博士（比較社会文化）



経 歴

1973 年 長崎県生まれ（49 歳）
1996 年 九州大学文学部考古学専攻卒業
2001 年 九州大学院比較社会文化研究科博士後期課程単位取得退学後
福岡県教育庁文化財保護課
2003 年 九州大学大学院人文科学研究院専任講師
2008 年 九州大学大学院人文科学研究院准教授

主な論著

『鏡と初期ヤマト政権』（すいれん舎 2007）

『同型鏡と倭の五王の時代』（同成社 2018）

『鏡の古代史』（角川選書 2019）

【受賞理由】

「古代鏡の分析による古墳時代を中心とした考古学的研究」

第 35 回濱田青陵賞選考委員会は、令和 5 年 5 月 28 日に開催され、厳正な審査の結果、九州大学大学院人文科学研究院准教授の辻田淳一郎氏に決定した。

辻田淳一郎氏は、1996 年に九州大学文学部史学科を卒業後、同大学院比較社会文化研究科に進学。2001 年に同博士後期課程を退学し、福岡県教育庁の文化財専門職として勤務した後、2003 年に九州大学大学院人文科学研究院専任講師に採用され、2008 年より同准教授を務めている。この間、2003 年に九州大学より博士学位を取得している。

辻田氏の主要な研究成果は、弥生時代・古墳時代の遺跡から多く出土する銅鏡の型式、製作技術、流通状況の精緻な実証的分析に基づいて、日本古代国家の形成過程を列島内の地域関係と東アジア史という複眼的視点から体系的に叙述したことである。その内容は、『鏡と初期ヤマト政権』（2007 年、すいれん舎）、『同型鏡と倭の五王の時代』（2018 年、同成社）、『鏡の古代史』（2019 年、角川選書）などの著作で公表されている。日本考古学の銅鏡研究は百年以上の重厚な研究史を持っているが、徹底的な資料分析と最新の発掘調査成果を結合させて、研究の地平をさらに大きく切り開いたことが高く評価できる。

辻田氏は、弥生時代中期から古墳時代終末までの千年近い時期の銅鏡資料を検討し、その流通や授受の形態において、3 世紀の古墳時代開始期前後と、5 世紀の古墳時代中期に大きな変化があり、その変化をもたらした歴史背景が存在することを明快に指摘する。

前者は古墳時代成立過程の問題であり、そこでは主に中国鏡の流入・流通形態が北部九州を窓口としていた弥生時代のあり方から、古墳時代初頭前後を境として近畿地域を流入・流通の中核とする形へと変化したことを論じる。その中で、各種中国鏡・三角縁神獣鏡・倭製鏡の位置づけについて検討し、ヤマト政権成立期の地域関係や階層関係を多種多様な銅鏡から読み取るアプローチを実践して見せた。

辻田氏の独創性が最も発揮されているのが、後者、つまり古墳時代中期の「倭の五王」の時代に起こったとみられる新たな中国鏡の流入とその歴史的意義についての分析である。古墳時代前期の三角縁神獣鏡などの研究が比較的早くから進んだのに対して、「踏返し」の技法で製作された「同型鏡群」と呼ばれる古墳時代中期以降の銅鏡については、本格的な研究がまだ十分ではなく、日本考古学の大きな課題の一つであった。

辻田氏は、朝鮮半島出土例を含む 130 面以上の同型鏡群の悉皆的な調査分析を進め、従来製作地について議論がある同型鏡群について、鈕孔形態などの技術的特徴からみて、5 世紀中頃の中国南朝で製作されて、倭王に贈られた銅鏡であると論じた。そし

て、それを入手した倭国の側では、同型鏡群を上位とし、中・小型の倭製鏡を下位とする形で新たな鏡の序列が形成されたこと、さらに倭国内では、文献史料からうかがえる「人制（ひとせい）」のような形で列島各地から大王のもとに仕えた「個人」に対して銅鏡の贈与が行われるようになったととらえて、同型鏡群が王権の地域把握に深く組み込まれた政治的な器物であったことを主張した。また、6世紀中頃から7世紀にかけて、国家形成が大きく進展するあり方について、自身のフィールドでもある北部九州地域の古墳時代遺跡の調査・研究などを通して、検討を進めている。

さきに示した著作においては、銅鏡そのものだけでなく出土遺跡についても詳細な考古学的検討を行い、さらに文献史学や人類学・社会学の成果、世界の他地域との比較検討などを加えながら、東アジア史的な観点で日本列島の古代国家形成過程が展望されている。

このように、辻田氏は、銅鏡を出発点としながらも、多様な考古学的成果と隣接諸分野の成果を統合しながら、広い視野と問題意識で古代国家形成史研究を牽引していく豊かな将来性を有している。よって、ここに第35回濱田青陵賞受賞者として選考するものである。

第35回濱田青陵賞選考委員長 小林 達雄

第35回 濱田青陵賞選考委員会委員

委員長	小林達雄	國學院大學名誉教授
委員	和田晴吾	兵庫県立博物館長・立命館大学名誉教授
委員	東野治之	奈良大学名誉教授
委員	中村慎一	金沢大学副学長
委員	福永伸哉	大阪大学人文科学研究科教授

辻田淳一郎氏記念講演要旨

鏡からみた日本古代国家形成過程 —倭の五王の時代を中心に—

辻田淳一郎（九州大学大学院人文科学研究院准教授）

1. はじめに：古墳時代の鏡と日本の古代国家形成

日本の古代国家成立時期をめぐるのは、都出比呂志氏による「七五三論争」という表現がよく知られている。それぞれ、7世紀・5世紀・3世紀に想定するもので、3世紀は邪馬台国の時代、5世紀は倭の五王の時代、7世紀は特に7世紀後半の天武・持統朝を律令国家の確立期とみる考え方である。このうち、3世紀中葉から6世紀代は古墳時代であることから、日本の古代国家成立過程を考える上で重要な時期であることが認識されてきた。古墳時代を国家の成立期と考えるか、あるいは国家成立の前段階と考えるかという点は、現在も考古学・文献史学を横断した主要な論点であり続けている。

この古墳時代の近畿地域を中心とした政治的秩序の形成において、大きな役割を果たしたと考えられる器物の一つとして、副葬品の主要な品目として出現する青銅鏡が挙げられる。古墳時代の鏡は、大きく大陸からもたらされた舶載鏡（中国鏡）と、列島で製作された倭製鏡に区分される。受賞理由の中にもあるように、日本考古学の銅鏡研究は百年以上の長い研究史を持つが、その中では、特に前期古墳に副葬された中国鏡（漢鏡・魏晉鏡）・三角縁神獣鏡と倭製鏡の研究が盛んに行われてきた。これは、弥生・古墳時代を通して、古墳時代前期に副葬された鏡の面数が最も多いことによるものである。筆者自身も、古墳時代前期の鏡の分析を出発点としてこれまで検討を行ってきた。

他方で、古墳時代の鏡の中でもう一つのピークとなるのが、古墳時代中・後期に用いられた同型鏡群とこの時期に属する倭製鏡である。以下でもみるように、これらのうち、特に同型鏡群は、いわゆる倭の五王による中国南朝への遣使の結果、列島にもたらされた中国製の鏡である可能性が想定されてきた一群である。もしこの理解が正しいとすれば、倭の五王の時代や、ひいては5世紀代を前後する時期の東アジア史を考える上での重要な考古資料であるということになる。

倭の五王の時代とされる5世紀は、考古学的な時代区分では古墳時代中期にあたり、百舌鳥・古市古墳群をはじめとした巨大前方後円墳が築造された時代である。この時代については、従来文献史学と考古学の双方から研究が積み重ねられてきた。5世紀代には、倭の五王の遣使に伴い、中国南朝の府官制的秩序の導入が志向され、高句麗や百濟などの朝鮮半島の諸政体と競合しながら、より上位の將軍号の除正（正式な除授、除授

は古い号を除き新しい号を授与すること）が目指された。また埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣や熊本県江田船山古墳出土大刀の銘文などから、倭王・武に比定されるワカタケル大王の時期には、各地の有力者やその子弟などが「杖刀人」・「典曹人」などの職掌を以て大王に仕える「人制」と呼ばれる仕組みが成立していたものと考えられている。

考古学的にみた場合、5世紀代は、大型古墳群の造営とその背景、宮と墳墓造営地との関係、渡来人と技術革新、鉄製武器・武具類の生産・流通からみた軍事的側面の増大、親族関係の父系化などが問題となっている。あわせて、前期にピークを迎えた鏡の生産・流通量が5世紀前半になると一旦大幅に減少するのに対し、5世紀半ば以降に新たな鏡が出現し、古墳に副葬されるようになる。

上記のような問題の中で特に今回注目したいのは、なぜ5世紀代に再び鏡が求められるようになるのかという点と、その結果として、列島内ではどのような秩序が形成されたのかという点である。このことは、冒頭で述べた、日本の古代国家形成を考える上で5世紀の倭の五王の時代はどのような時期と理解することができるかという問題とも重なってくる。以上のような点を念頭に置きながら、本稿では5世紀代の鏡と古代国家形成過程という点について考えてみたい。

2. 同型鏡群の製作地と製作背景をめぐる諸問題：同型鏡群の「特鑄説」

上にも述べたように、古墳時代の鏡は、大きく古墳時代前期に主に流通した①中国鏡（漢鏡・魏晉鏡）・②三角縁神獣鏡・③前期倭製鏡と、古墳時代中・後期に流通した④同型鏡群・⑤中・後期倭製鏡に区分することができる。弥生時代までは北部九州を主な窓口として中国製の鏡が流入し、流通していたものと考えられるが、古墳時代になると、近畿を中心として鏡が流入・流通するようになり、このことが、大型古墳群の造営とあわせて、近畿地域、特に奈良盆地周辺の中心性を高めたものと考えられている（筆者はこの過程を「古墳時代前期威信財システム／求心的競合関係モデル」と呼んでいる）。その後前期末から中期にかけて、大阪平野で百舌鳥・古市古墳群が造営されるようになり、主要な副葬品が鉄製武器・武具類へと変わる中で、鏡の生産・流通量は大きく減少した。ところが、中期中葉（5世紀中葉）になると新たな鏡が出現し、再び鏡の副葬が活発となった。ここで新たに用いられるようになるのが「同型鏡（群）」と呼ばれる一群の鏡である。

同型鏡群は、ある鏡を原型として、複数の鑄型を製作する踏み返し技法（同型技法）を用いることによって、同一文様鏡が大量に複製生産されたものである。中国の後漢代～西晋代の鏡を原鏡としており、約30種約140面が存在している。全体の約7割が19センチ以上であり、大型の鏡が多いという特徴がある（最大の鏡は、旧ベルリン民俗博物館所蔵画文帯仏獣鏡Bの33.6cm：図1）。分布は日本列島に集中しており、それ以外に7面朝鮮半島での出土資料がある。中国・北京の故宫博物院蔵鏡の中にも1面この種

の鏡（画文帯仏獣鏡A）が含まれていることが知られている。前期の三角縁神獣鏡と同様に、分布が日本に偏るなど、製作地について議論がある一群である。出現時期についても議論があるが、千葉県祇園大塚山古墳出土鏡（画文帯仏獣鏡B・30.4cm）などが副葬時期が古く、5世紀中葉前後と考えられている。踏み返し技法によって製作が行われているため、中国鏡を原鏡としながら文様の不鮮明なものが多いという特徴がある（図2）。

具体的な製作地については諸説あるが、小林行雄氏（1962・1965）が倭の五王の遣使に伴い南朝から下賜されたという見方を提唱して以降、基本的にはこの中国南朝製説が支持されてきている。ただし、上記のような踏み返し技法による踏み返しの世代差の観点から、踏み返しの初期のものについては中国製で、踏み返しの世代が新しいものについては列島製とする説や、百済・武寧王陵での出土事例をもとに、百済製説あるいは百済を経由して列島にもたらされたとする説などもある。

この問題について、同型技法による範傷の検討を行った川西宏幸氏（2004）は、列島出土鏡の中に踏み返しの原鏡にあたる鏡が殆ど含まれていないことを明らかにし、これらは文様の精緻な鏡であるため輸出に供されなかった可能性を指摘した。この結果、同型鏡群が基本的に南朝産であることを示すとともに、外交上で大きな進展のあった438年の珍の遣使（倭隋等十三人の將軍号除正を求めて認められる）もしくは451年の済の遣使（軍郡二十三人の除正等）の際に与えられた可能性を論じている。小林行雄氏以来の中国南朝製説を補強したものということができる。

この川西氏説は鏡研究者を中心に広く支持されているが、踏み返し技法などの観点からすれば、一部についての列島製説や百済製説の可能性も存在している。このため、筆者自身、同型鏡群の製作技術について検討することで中国南朝製説の検証を試みた。このときに具体的に検証方法として考えたのが、鈕孔製作技術の観察という点である。踏み返し技法による製作では、文様は原鏡から鋳型に転写されるが、鈕孔に関してはそれぞれの鋳型で土製などの中子を設置することが必要となる。このため、各資料の鈕孔形態を観察することにより、踏み返しの古い世代と新しい世代とで製作技術が異なる場合があるのかどうかの検証が可能になると考えたのである。この点を確認するべく、各地に所蔵されている同型鏡群の実物資料を観察した結果、鈕孔の形態・製作技術の特徴は鏡の種類や踏み返しの世代を超えてほぼ共通しており、また同時期の倭製鏡の鈕孔製作技術とも異なっていること、また倭製鏡にはみられない外区改変・拡大事例（図1）などが認められることなどから、同型鏡群は全体として中国南朝製であるという小林氏・川西氏の妥当性をあらためて確認した。

その上で、列島出土鏡は、川西氏も指摘するように踏み返しの最新世代に属するようなものが多く、その点で文様の不鮮明なものが多いことから、同型鏡群が粗製濫造鏡でかつ「末端」の鏡であること、また南朝・斉王朝の建武五年（498）銘画文帯同向式神獣

鏡との技術的な共通性などから、これらの同型鏡群は、南朝宋の官営工房（尚方）において倭国向けに特別に生産された一群であるという仮説（同型鏡群の特鑄説）を提示した。これは、同型鏡群の原鏡において、倭人が好みそうな鏡種が選択されていること、また大型鏡が多数派を占めることなどから、そうした鏡を求める倭国側からの要望に応える形で生産が行われたとする見方である。あわせて、同型鏡群自体は踏み返しによって文様が不鮮明なものが多いが、踏み返しの原鏡として使用された鏡は文様が精緻な優品であったことが想定されることから、これらは当時の南朝の市中においてどこにでも存在していたというよりは、南朝膝下で保管・継承された鏡であったものと想定している。

また同型鏡群は同一文様鏡が多く存在する点が特徴であるが、その中には、同一文様鏡が 28 面存在する画文帯同向式神獸鏡 C（面径 21cm 前後）と呼ばれる一群もあり、これらは前期の三角縁神獸鏡と同様の性格が期待された可能性もある。製作年代については、多数の鏡種について、踏み返しの最新世代のものが 5 世紀後半の早い時期の古墳に副葬されていることから、5 世紀中葉前後の短期間に集中して生産が行われた可能性を想定し、倭王・済が遣使した 451 年や 460 年が賜与された機会として重要であるものと考えた。この年代観などについては、その後別の意見なども提示されており、また三次元計測による製作技術の検討なども進められていることから、今後のさらなる議論が期待される。

3. 同型鏡群の授受と「人制」：「参向型」1 類と 2 類

同型鏡群についてさらに問題となるのは、なぜ 5 世紀中葉前後の時期に、再び鏡が求められるようになったか、またなぜそこにおいて列島内の倭製鏡の生産ではなく、中国南朝製の鏡が求められたか、という点である。これについては、前期の鏡と入れ替わる形で 5 世紀前半において鉄製武器・武具類の生産・流通・消費が行われるようになった結果、前期以来の伝統的価値観を持った各地の地域集団から軍事的側面の偏重に対する反動があったことが考えられる。同型鏡群の授受は、それに対して王権中枢の側が採ったいわば「懐柔策」であった可能性を想定している。またそこにおいても、列島内で製作される倭製鏡でなく、中国南朝製の同型鏡群が求められた理由としては、列島の最上位層内部の関係が比較的拮抗している中で、外交上の代表権者として倭王に独占的な差配が可能な器物という点において、將軍号の除正などと深く結びついた形での「外部」に権威の源泉を求めたものと考えることができる。この点で、そのような政策を立案したブレーンの存在（渡来系の府官層など）が想定されるところであり、外的権威としての南朝遣使に打開策を求めたものと考えられる。

こうした同型鏡群は、列島内部に流入した後、5 世紀後半～6 世紀代における列島各地の古墳（および朝鮮半島の墳墓）に副葬された（図 3）。流通時期については、5 世

紀後葉の時期が中心とみる意見が多いが、筆者は大きく 5 世紀中葉・5 世紀後葉・6 世紀初頭～前葉の 3 つの時期それぞれにおいて異なる意味合いを付与されながら各地に流通したものと考えている。本稿では、5 世紀後葉における流通に絞って検討するが、この時期は、いわゆる倭王武・ワカタケル大王の時代にあたり、前述の埼玉県稲荷山古墳や熊本県江田船山古墳の銘文刀剣のような人制関連資料が出土する時期である。ここで注目されるのが、銘文刀剣が出土した稲荷山古墳礫槨と江田船山古墳石棺のいずれからも同型鏡が出土している点である。川西宏幸氏（2000）は、この点を元に、同型鏡群の授受は、こうした人制のような脈絡で各地から上番した人々に対して行われたとし、「参向型」とする見方を提示した。他方、前期の三角縁神獣鏡などについては、小林行雄氏と同様に、近畿から各地に使者が派遣されて配布されたとする「下向型」と捉えている。この点については、下垣仁志氏（2003）や森下章司氏（2005）らにより、前期においても、近畿を挟んだ東西の各地域で副葬品の組合せなどが共通することなどから、「参向型」の授受が基本であったとする可能性が指摘されて以来、筆者も含めてその可能性を想定する研究者が増えている。この点をふまえて考えた場合、問題となるのが、前期の「参向型」においても、5 世紀代の人制のようなイメージで理解することができるかどうかという点である。筆者はこの点をもとに、5 世紀代の同型鏡群における「参向型」が、いわば各地から大王のもとに上番・奉仕した有力者およびその子弟などが「個人」として鏡などを贈与されたものと考えられるのに対し、前期の「参向型」は、列島各地の有力集団が、上位層の代替わりなどを契機として近畿地域に参向し、大型モニュメント築造・儀礼への参加などへの見返りとして鏡などが与えられたものと考えている。以上から、前期の「参向型」と中期の「参向型」を区分し、前者を「参向型 1 類」、後者を「参向型 2 類」と呼称している。この点で、前期における地域間関係と中期後半以降の地域間関係とでは、同じ「参向型」の鏡の授受であったとしても、政治的関係の実態などが大きく異なっていた可能性が考えられる。言い換えれば、「参向型 2 類」のような形で各地の有力者およびその子弟と王権中枢が鏡などの授受を介して直接結びつくことにより、王権を中心とした政治的関係が大きく変容していくことになったと考えることができる。同型鏡群の授受およびそれに関連する考古学的現象は、この点で「人制」の問題や古代国家形成の問題ともつながってくるものと考えられるのである。

4. 結語

本稿では、主に 5 世紀代の同型鏡群の生産・流通とその背景について考えてきた。鏡からみた古代国家形成過程という点についていえば、筆者自身は、日本列島で古代国家形成が大きく進展するのは、6 世紀前半の磐井の乱（527-528）などを契機として、各地でミヤケ制・国造制・部民制が展開することを大きな画期とすると考えるとともに、そ

うした秩序が7世紀後半以降に再編されて律令国家が成立したと考える立場を採っている。実際、6世紀中葉以降は列島内での鏡の生産・流通が再び大きく減少したと考えられることから、本稿でみてきた古墳時代前・中期における鏡の流通や授受は、それ以前の段階において、近畿地域を中心とした政治的秩序の形成に深く関わる器物であったと考えている。特に5世紀代の倭の五王の時代については、文献史学と考古学の双方において重なる論点も多く、この意味で筆者自身の仮説のいくつかについては、鏡という考古資料の検討を通して、文献史学と考古学の成果を接続する試みであるものと考えている。倭の五王の遣使の時代背景や5・6世紀代における朝鮮半島情勢との関係など、論じることができなかった点が多いが、参考文献とあわせて拙著（2018・2019）などを御参照いただければ幸いである。

【参考文献】

- 一瀬和夫(2005)『大王墓と前方後円墳』吉川弘文館
- 岩永省三(2022)『古代国家形成過程論』すいれん舎
- 岩本崇(2020)『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房
- 上野祥史編(2013)『祇園大塚山古墳とその時代』六一書房
- 梅原末治(1931)『欧米に於ける支那古鏡』刀江書院
- 岡村秀典(2011)「東アジア情勢と古墳文化」広瀬和雄・和田晴吾編『講座 日本の考古学 古墳時代(上)』青木書店
- 岡村秀典(2017)『鏡が語る古代史』岩波新書
- 加藤一郎(2020)『古墳時代後期倭鏡考』六一書房
- 加藤一郎(2021)『倭王権の考古学』早稲田大学出版部
- 河上邦彦(2006)「中・後期古墳出土のいわゆる舶載鏡について」『3次元デジタルアーカイブ 古鏡総覧(Ⅱ)』学生社
- 川西宏幸(2000)「同型鏡考」(川西 2004 に所収)
- 川西宏幸(2004)『同型鏡とワカタケル』同成社
- 川本芳昭(2005)『中国の歴史 05 中華の崩壊と拡大』講談社
- 熊谷公男(2001)『日本の歴史 03 大王から天皇へ』講談社
- 車崎正彦編(2002)『考古資料大観 5 弥生・古墳時代 鏡』小学館
- 河内春人(2015)『日本古代君主号の研究』八木書店
- 小林行雄(1961)『古墳時代の研究』青木書店
- 小林行雄(1962)「古墳文化の形成」(小林 1976『古墳文化論考』平凡社に所収)
- 小林行雄(1965)『古鏡』学生社
- 近藤義郎(1983)『前方後円墳の時代』岩波書店
- 坂元義種(1978)『古代東アジアの日本と朝鮮』吉川弘文館
- 清水康二(2013)「古墳時代中後期に見られる同型鏡群製作の一樣相」『FUSUS』6
- 下垣仁志(2003)「古墳時代前期倭製鏡の流通」(下垣 2011 に所収)

下垣仁志(2011)『古墳時代の王権構造』吉川弘文館

下垣仁志(2018)『古墳時代の国家形成』吉川弘文館

下垣仁志(2022)『鏡の古墳時代』吉川弘文館

白石太一郎(1997)「有銘刀剣の考古学的検討」『新しい史料学を求めて』吉川弘文館

鈴木靖民(2012)『倭国史の展開と東アジア』岩波書店

田中晋作(2001)『百舌鳥・古市古墳群の研究』学生社

田中良之(1995)『古墳時代親族構造の研究』柏書房

田中史生(2013)「倭の五王と列島支配」『岩波講座日本歴史第一巻 原始・古代一』岩波書店

田中史生(2019)『渡来人と帰化人』角川選書

辻田淳一郎(2007)『鏡と初期ヤマト政権』すいれん舎

辻田淳一郎(2018)『同型鏡と倭の五王の時代』同成社

辻田淳一郎(2019)『鏡の古代史』角川選書

都出比呂志(2005)『前方後円墳と社会』塙書房

東野治之(2004)『日本古代金石文の研究』岩波書店

西川寿勝(2008)「継体天皇四つの王宮の謎」『継体天皇 二つの陵墓、四つの王宮』新泉社

初村武寛(2020)「3D データを用いた同型鏡群の比較検討 I」『元興寺文化財研究所研究報告 2019』

樋口隆康(1960)「画文帯神獸鏡と古墳文化」『史林』43-5

樋口隆康(1972)「武寧王陵出土鏡と七子鏡」『史林』55-4

樋口隆康(1981)「埼玉稲荷山古墳出土鏡をめぐって」『考古学メモワール』学生社

福永伸哉・岡村秀典・岸本直文・車崎正彦・小山田宏一(2003)『シンポジウム 三角縁神獸鏡』学生社

福永伸哉(2005)『三角縁神獸鏡の研究』大阪大学出版会

福永伸哉(2007)「継体王権と韓半島的前方後円墳」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科

福永伸哉(2021)「武寧王陵出土鏡の系譜と年代」『百済研究』74

古市晃(2019)『国家形成期の王宮と地域社会』塙書房

古市晃(2021)『倭国』講談社現代新書

水野敏典(2012)「三次元計測技術を応用した銅鏡研究」『考古学ジャーナル』635

森公章(2010)『倭の五王』山川出版社

森公章(2012)「五世紀の銘文刀剣と倭王権の支配体制」『東洋大学文学部紀要』史学科篇第 38 号

森下章司(1991)「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』74-6

森下章司(2005)「器物の生産・授受・保有形態と王権」前川和也・岡村秀典編『国家形成の比較研究』学生社

森下章司(2011)「伝仁徳陵古墳出土鏡と東アジア」『徹底分析・仁徳天皇陵—巨大前方後円墳の実像を探る—』堺市

吉村武彦(2023)『日本古代国家形成史の研究：制度・文化・社会』岩波書店

若狭徹(2016)『古代の東国 1 前方後円墳と東国社会』吉川弘文館

和田晴吾(2015)『古墳時代の生産と流通』吉川弘文館

表 1-1 同型鏡群の種類と大きさ

鏡式名	面径	面数
方格規矩四神鏡 A	17.8	2
方格規矩四神鏡 B	16.5	1
細線式獸帯鏡 A	22.3	7
細線式獸帯鏡 B	24	2
細線式獸帯鏡 C	20.6	1
細線式獸帯鏡 D	18.1	1
細線式獸帯鏡 E	23.6	1
浮彫式獸帯鏡 A	17.5	12
浮彫式獸帯鏡 B	23.2	4
浮彫式獸帯鏡 C	17.8	1
浮彫式獸帯鏡 D	20.6	1
浮彫式獸帯鏡 E	20.3	1
盤龍鏡	11.6	2
神人龍虎画像鏡 A	20.5	5
神人龍虎画像鏡 B	18.2	1
神人歌舞画像鏡	20.3	12
神人車馬画像鏡	22.2	3
神獸車馬画像鏡	20.1	1
画文帯環状乳神獸鏡 A	14.8	10
画文帯環状乳神獸鏡 B	15.3	6
画文帯環状乳神獸鏡 C	21	7
画文帯環状乳神獸鏡 D	14.8	1
求心式神獸鏡	11.7	1
画文帯対置式神獸鏡	20.2	4
画文帯同向式神獸鏡 A	14.8	2
画文帯同向式神獸鏡 B	19.4	6
画文帯同向式神獸鏡 C	21	28
画文帯仏獸鏡 A	21.5	4
画文帯仏獸鏡 B	23.6	7
八鳳鏡	18.8	2
	合計	136

※面径は平均

表 1-2 同型鏡群の面径の序列

鏡式名	面径	面数
画文帯仏獸鏡 B	24.2	7
細線式獸帯鏡 B	24	2
細線式獸帯鏡 E	23.6	1
細線式獸帯鏡 A	23.3	7
浮彫式獸帯鏡 B	23.2	4
神人車馬画像鏡	22.5	3
画文帯仏獸鏡 A	22.1	4
画文帯環状乳神獸鏡 C	21.9	7
画文帯同向式神獸鏡 C	21.2	28
画文帯対置式神獸鏡	20.8	4
神人龍虎画像鏡 A	20.7	5
神人歌舞画像鏡	20.7	12
浮彫式獸帯鏡 D	20.6	1
細線式獸帯鏡 C	20.6	1
浮彫式獸帯鏡 E	20.3	1
神獸車馬画像鏡	20.1	1
画文帯同向式神獸鏡 B	19.6	6
八鳳鏡	18.9	2
神人龍虎画像鏡 B	18.2	1
細線式獸帯鏡 D	18.1	1
浮彫式獸帯鏡 A	18.1	12
方格規矩四神鏡 A	17.8	2
浮彫式獸帯鏡 C	17.8	1
方格規矩四神鏡 B	16.5	1
画文帯環状乳神獸鏡 B	15.6	6
画文帯環状乳神獸鏡 A	15.5	10
画文帯同向式神獸鏡 A	14.9	2
画文帯環状乳神獸鏡 D	14.8	1
求心式神獸鏡	11.7	1
盤龍鏡	11.6	2
	合計	136

小計
94小計
42

※面径は現存の各鏡種の同型鏡中最大のもの

表 1 同型鏡群の鏡種と種類と大きさ・面径の序列（辻田 2019）

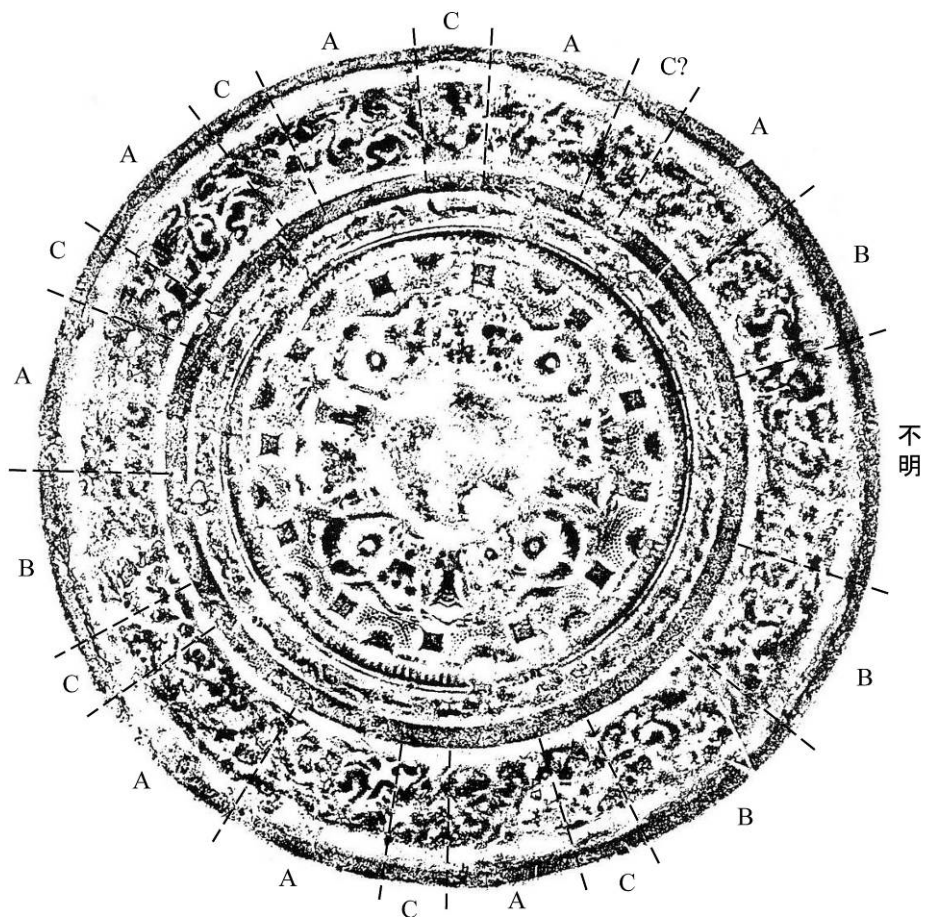


図1 旧ベルリン民俗博物館所蔵画文帯仏獣鏡B
(梅原 1931 をもとに辻田改変)



図2 福岡県山の神古墳出土画文帯環状乳神獣鏡A (面径 15.0cm)
九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室所蔵

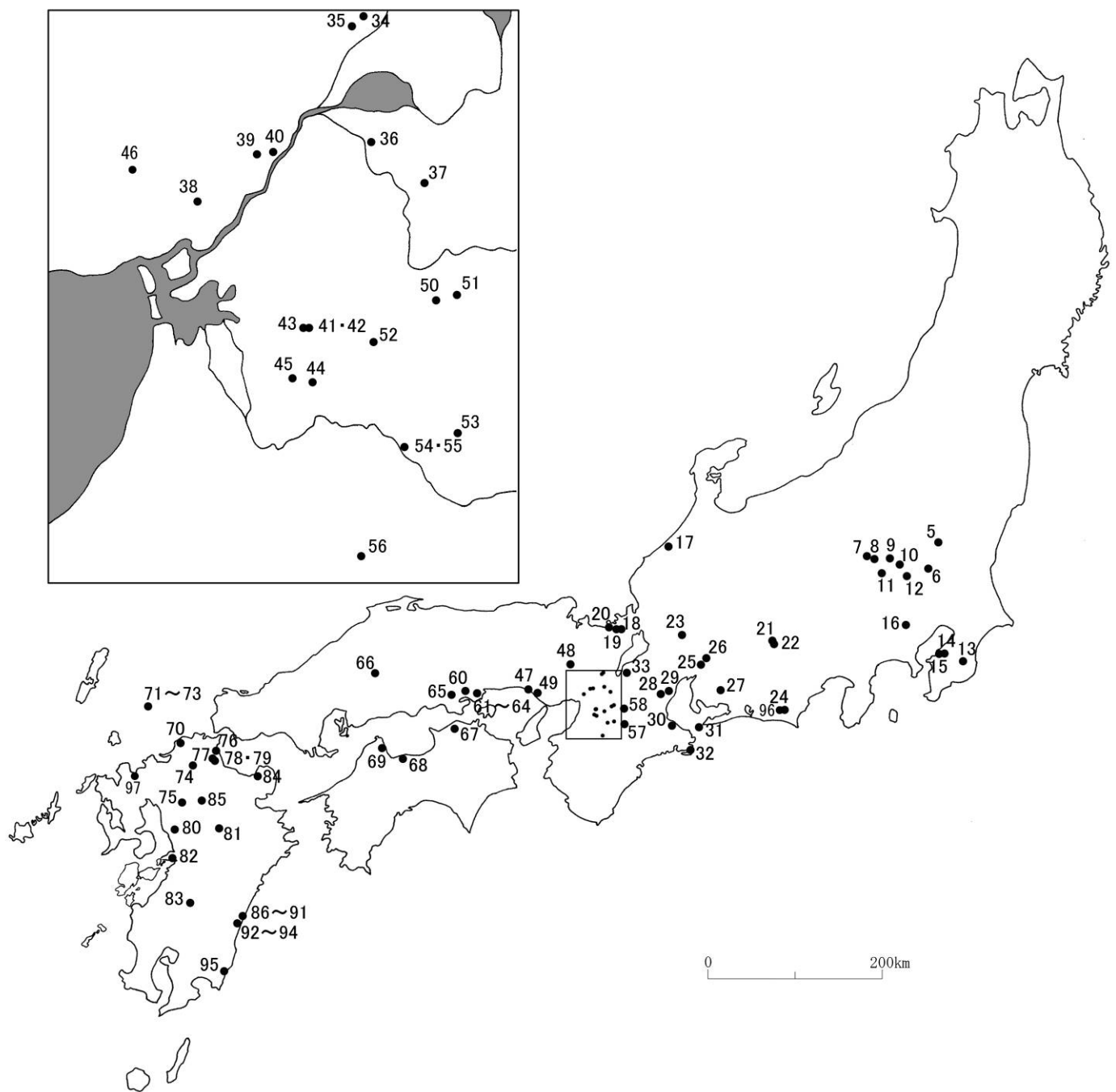


図3 日本列島における同型鏡群の分布（辻田 2019）

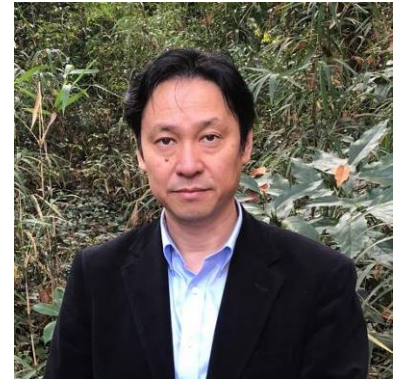
倭の五王の時代を考える

中国南朝の宋帝国(劉宋)の正史『宋書』に登場する、倭国の王、讃・珍・濟・興・武を倭の五王(わのごおう)という。5世紀初頭から末まで、1世紀近くにわたり、晋、宋、齊などの中国の南朝に遣使入貢し、官職を授与された。倭の五王が記紀における歴代天皇の誰にあたるかについては諸説あり、これまでも多くの文献史学、考古学の研究者たちが論じてきた。もはや議論の趨勢は、定まりつつあるようにも見える。しかし稲荷山古墳や江田船山古墳の銘文刀剣などに匹敵するインパクトある考古学的発見を俟つだけでよいのだろうか。また、文献史学の分野でも研究の細分化が進み従来とは異なる見解も。文献史学・考古学の研究は進んでいる。改めて今、どこまで見えてきたのか考える必要があるだろう。

今日、五名の研究者が、倭の五王の時代に迫る。

田中 史生 (たなか ふみお)

早稲田大学文学学術院教授 / 日本古代史 国際交流史
Keyword：倭の五王・東晋・宋・高句麗・百済・中国官爵
府官制秩序・天下



〔略歴〕

昭和 42 年 (1967) 福岡県生まれ。
早稲田大学第一文学部卒。
國學院大學大学院文学研究科博士課程後期終了、博士 (歴史学)
島根県埋蔵文化調査センターに勤務し発掘調査などに従事した後、
1998 年に関東学院大学経済学部にて専任講師として着任。
2001 年に助教授、2007 年教授。
2018 年から現在早稲田大学 文学学術院 教授

〔主な論著〕

- ・『日本古代国家の民族支配と渡来人』校倉書房、1997 年
- ・『倭国と渡来人』吉川弘文館、2005 年
- ・『越境の古代史』ちくま新書、2009 年
- ・『国際交易と古代列島』吉川弘文館、2012 年
- ・『国際交易の古代列島』角川選書、2016 年
- ・『渡来人と帰化人』角川選書、2019 年
- ・「渡来・帰化・建郡と古代日本―新羅人と高麗人」『新羅人の渡来―『日本書紀』『続日本紀』の記事を中心に―』須田勉・高橋一夫編 高志書院、2023 年
- ・「倭の五王と列島支配」『岩波講座 日本歴史』巻 1、大津透他編 岩波書店
- ・「秦氏と宗像の神―「秦氏本系帳」を手がかりとして―」『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺跡群特別研究事業成果報告書』(「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺跡群保存活用協議会)2023 年
- ・「七・八世紀の渡来系移住民」『軍事と対外交渉〈講座 畿内の古代学 IV〉』雄山閣 2022 年
- ・「古代文献から読み取れる日本列島の百済系・中国系移住民」『百済研究 (74)』2021 年
- ・「百済王氏と百済郡、高麗王氏・肖奈王氏と高麗郡」『古代渡来文化研究 2 古代日本と渡来系移住民』須田勉・荒井秀規編 高志書院、2021 年

「倭の五王の南朝遣使とその背景」

はじめに

朝鮮半島北部の高句麗は、313 年に楽浪郡と帯方郡を滅ぼし、400 年以上続いた中国による当地の直接支配を終焉させると、その勢力を南に伸ばし始めた。この高句麗南進に百済は強く抵抗し、倭との軍事的な同盟関係を締結する。一方、緊迫した東アジア情勢への関与が求められた倭では、各地の首長層が「倭王」を核に結集し、軍事を含む王権の対外活動の実務を担う体制をすすめた。首長層は、その活動を利用して独自に国際交流を行い、威信財や渡来技術者を獲得して、これらを自らの家産に組み入れた。当該期の「倭王」は、倭人の外交を主導し、各首長層に国際交流の機会を分配する大首長とし

てあった(田中 2005)。

この中で、5世紀に「倭の五王」が登場する。「倭の五王」とは、中国史書が伝える、中国南朝に冊封された讃・珍・済・興・武の5人の倭国王の総称である。史書で知られる倭王の中国への遣使は、4世紀以前は266年に西晋に入貢した「倭女王」まで遡り、5世紀後は600年の遣隋使まで下る。つまり「倭の五王」とは、前後1世紀以上の空白に挟まれて、継続的に中国に入貢した倭王をひとまとまりとして捉える概念であり、そこに当該期の倭王権の特徴をみる学術的用語でもある。

しかし、その歴史的背景を具体的に把握しようとするとき、諸説において解釈の分かれている以下の点が大きな問題となる。

論点1 倭王権の南朝遣使の開始は413年か421年か。

論点2 倭国内における中国官爵の意味。

論点3 武王後に中国への入貢が途絶するのはなぜか。

本報告では、上記の論点を中心に倭の五王の南朝遣使の展開をあらためて整理し、その背景について考えてみたいと思う。

1. 南朝への遣使の開始をめぐって(論点1)

5世紀に入ることの中国は、北魏が華北統一に向けた動きを本格化させる一方、江南を支配する東晋は反乱を抱えて著しく疲弊していた。420年6月、東晋の軍官劉裕は、自らが擁立した恵帝から禅譲をうけて宋の武帝として即位し、東晋は滅亡する。翌年、倭讃は、初めて宋朝に遣使して除授を受けた(『宋書』倭国伝)。これが倭の五王による遣中使の確実な記録の初見である。ただし讃には、これ以前の東晋の時代から遣使朝貢を行っていたことを示す次のような史料がある。

① 『梁書』巻54・倭伝

晋安帝の時、倭王賛あり。賛死して、弟の弥立つ。弥死して、子の済立つ。済死して、子の興立つ。興死して、弟の武立つ。

② 『晋書』巻10・安帝紀・義熙9年(413)条是歳条

是歳、高句麗、倭国及び西南夷銅頭大師、並に方物を献ず。

③ 『南史』巻79・倭国伝

晋安帝時、倭王讃あり、使を遣わし朝貢す。

④ 『太平御覧』巻981・香部1・麝条

義熙起居注に曰く、倭国貂皮・人参等を献ず。詔して細篳・麝香を賜う。

⑤ 『書紀』応神37年2月戊午朔条

阿知使主・都加使主を呉に遣わして、縫工女を求めしむ。爰に阿知使主等、高麗国に渡りて、呉に達さんと欲す。則ち高麗に至れども、更に道路を知らず。道を知る者を高麗に乞ふ。高麗の王、乃ち久礼波・久礼志の二人を副えて、導者と為す。是

に由りて、呉に通ずること得たり。呉の王、是に、工女兄媛・弟媛、呉織、穴織の四の婦女を与う。

このうち①～③は中国正史だが、③は①や『宋書』の影響のもとに作文されたもので、オリジナリティは低い(坂元義種 1978)。一方、④⑤はこれら中国正史に対応する可能性が指摘される史料で、④は義熙年間(405-418)の東晋朝廷の記録「義熙起居注」の逸文を10世紀成立の『太平御覧』が伝えたものである。以上から413年の「倭国使」の解釈について、主に次の3説が有力説とされている。

《共同入貢説》高句麗・倭国が共同で入貢した(橋本 1956、池田 2002)。

《倭人捕虜説》高句麗が捕虜にした倭人を「倭国使」に擬して入貢させた。(坂元 1981)

《単独入貢説》倭国が単独で入貢した(石井 2005)。

このうち共同入貢説と倭人捕虜説は、いずれも413年の「倭国使」に高句麗の関与を想定するもので、その根拠として重視されているのが④である。④の東晋への献物は倭国ではなく高句麗の特産物であること、東晋からの賜物の細笙も小笙＝和を指し、「和」は同韻国名の倭国への賜物にふさわしい(池田 2002)。したがって、413年の「倭国使」は高句麗の影響下にあるとみるべきというものである。

ところが近年、④は献物だけでなく賜物の細笙・麝香も高句麗の音楽・仏教事情からみて高句麗に対するものとしてふさわしく、「倭国」は高句麗の誤記・誤引とする説が出され(石井 2005)、④に重大な疑義が生じることとなった。

そうすると、⑤も倭王武に比定される雄略紀の類似記事がオリジナルで(田中 2023)、413年の出来事とは結びつかないから、413年の「倭国使」関連史料としてある程度信が置けるのは①②のみとなる。このうち②は、あくまで高句麗の遣使と倭国の遣使がそれぞれ413年にあったとするのであって、共に来たという意味ではない。つまり、共同入貢説、倭人捕虜説を支える信頼に足る史料はなく、史料批判上は単独入貢とするのが最も妥当な解釈となる。①によれば、その主体が讃の可能性はあるとすべきである。

2. 413年の倭国単独入貢の背景について(論点1)

では、413年に倭国が単独で東晋に入貢した背景は何か。その1つとして注目されるのは、高句麗にとって近海の航路上の要衝である山東半島が、東晋の手に落ちたことである。すなわち、410年、劉裕率いる東晋軍が山東半島の南燕を攻略した。これを警戒した高句麗は、413年、東晋入貢を70年ぶりに再開させる。すなわち、倭国にとって東晋との交渉開始は、高句麗を牽制しうるものであり、山東ルートの開通で倭国と南朝との交渉も一気に容易となった(川本 1998)。

ただし、高句麗と対立する百済の東晋入貢は、すでに372年、386年にもあるから(『晋書』)、百済と連携する倭国の東晋入貢が413年となったのは、東晋の山東半島攻略だけが影響したのではないだろう。この点で、直前の倭国の対外関係に関して記した

「広開土王碑文」はあらためて注目される。それによると高句麗は、「辛卯年」(391)以来新羅・百済に侵攻する倭を永樂 10 年(400)に新羅から退け、この4年後、百済を通じて高句麗の帶方界に侵入した倭を撃破し、同 17 年(407)には「歩騎五万」によって敵(倭を含むか)を壊滅させている。「広開土王碑文」に誇張があるとしても、南進の勢いを保つ高句麗が、倭国を圧倒していたのは間違いない。

この問題とも関連し、『書紀』神功皇后摂政紀 5 年 3 月己酉条には、新羅が、倭国で「質」となっていた王弟を計略によって奪還し、倭国と軍事的に衝突したとする話がある。同様の話は『三国史記』『三国遺事』にもあり、そこでは同時期に高句麗からも質を帰国させたことになっているが、高句麗との衝突は起こっていない。これらの話は、高句麗・倭両国に質を派遣し両属的外交をすすめていた新羅が、417 年に即位した訥祗王の時代、高句麗南進の圧力を前に、外交政策の転換をはかり、倭と対抗する一方、高句麗とは一定の自立性を保ちつつ遣使を繰り返し従属する路線に転換した史実の反映とみられている(木村 2004)。

以上のように、東晋入貢直前の倭国は、対高句麗関係で圧倒的劣勢に追いやられ、新羅からも完全に見限られつつあった。外交を主導する大王が首長層の結集核となり、その成果を分配する王権の構造は、危うくなっていたと想定される。こうした状況下で「倭」の体制保証と国際的有位性の付与ができる外部勢力は、中華王朝以外に存在しない。要するに倭国の中国南朝と外交の軸は、対中関係そのものにあるのではなく、倭王を結集核として展開する支配層の朝鮮半島諸勢力との関係にあったと考えられる。この点において、5 世紀の倭国が中国南朝に求めた官爵は、王権にとって極めて重要な意味を持ったはずである。

3. 中国官爵の意味をめぐって(論点 2)

『宋書』倭国伝によると、425 年、讃は中国系知識人で司馬の曹達を宋へ派遣した。魏晋期以後の中国では、方面軍を指揮して征・鎮・安・平を冠した諸将軍には府を開くことが認められ、長史・司馬・主簿・功曹・参軍の府官がおかれた。曹達の冠した司馬も、讃が宋に「安東将軍」に除せられたことを根拠とする、安東将軍府の府官としての司馬である(坂元 1978)。また 438 年に珍は臣僚の倭隋ら 13 人に「平西・征虜・冠軍・輔国将軍」号を仮授し、宋に除正を求めて認められた。さらに 451 年には、倭王済が 23 人に将軍号・郡太守号(「軍郡」)の除正を求め、宋はこれも認めた。

以上の府官や中国官爵の評価について、坂元義種は、曹達の司馬は百済の府官同様、対中外交用の虚職とし、倭国王以下支配層の中国官爵の仮授・除正も、朝鮮半島南部の「軍事支配」に役立てることを目的としたものとした(坂元 1978・1981)。これに対し鈴木靖民は、倭国を含む中国周辺国では、中国官爵の継受を契機に府官を持つ将軍府が開府されると、臣僚らに諸将軍・郡太守の任官も行って、僚属制的政治秩序を形成し、これが一定の実質的支配機構の機能・役割を果たし得たとし、これを「府官制秩序」と呼んだ(鈴木 2012)。ま

た、3世紀に魏が倭王臣僚に直接与えた率善中郎将・率善校尉には倭王の仮授がなかったこと、しかし5世紀は倭王を介した階層的な秩序を中国王朝が認める形式となっていることに、歴史段階的差を見出した。以後、この鈴木の説が、武器・武具、鏡の分布をめぐる考古学の研究などにも一定の影響を与えることとなった。

近年、文献史学では、司馬などの府官の国内的機能を疑い、「府官制秩序」を否定的に捉える見解もある。確かに中国において府官は、長史以下の將軍府の府官のことを指す。しかし鈴木「府官制秩序」は、主に百済の例を参考に、倭王を軸とした仮授・除正体制による中国官爵の階層的秩序が、中国王朝の権威に依存し形成されていたとするものであるから、府官のみに注目した批判は有効ではない。倭王族とみられる倭隋の「平西」將軍の仮授・除正が、倭王権の所在地を軸とした方位を表すものであるように、中国官爵は倭王を軸とした秩序の中で位置づけられていたことが確実である。しかも百済についても、府官の併せ持つ將軍号・太守号が百済王権の独自の支配体制・階層構造と結びついて機能したことが、ある程度実証されている(井上 2020)。

ただし、倭国では中国官爵の利用した僚属制秩序の形成が430年代から始まるが、百済ではこれが450年代まで遅れる。また、百済は將軍号・太守号だけでなく、王号・侯号も用いるから、將軍号と太守号だけの倭国とは、その構成も異なる。要するに中国官爵は、各国の事情に対応した運用がなされていたとみられ、倭国が百済にならってこれを整えたわけでもない。残念ながら、地方官たる郡太守号については、倭国のものは具体的な名称が伝わらず、どのような性格のものであったかを明確にし難い。ただ論理的には、太守号の冠したであろう地域名は、「南朝鮮の支配にたずさわったもの」と解するか(坂元 1978)、列島諸地域の地名にちなむとするか(鈴木 2012)、あるいはその両者をあわせたものとなろう。

しかし5世紀中葉の倭王権は、人制に示されるように、この郡太守号が登場する時期と重なり、地方首長層との結びつきを前代以上に強化していた。倭国の郡太守号に、列島外地域名を冠すものが含まれていたかどうかは不明とせざるを得ないが、少なくとも当時の王権と列島各地の関係強化を反映し、列島内地域名を冠するものがあつた蓋然性は極めて高いといえるだろう。

4. 中国入貢の途絶をめぐって(論点3)

では、武王以降、倭王権の対中外交はなぜ途絶したのか。従来、その背景として、倭王権の自立的な成長が想定されてきた。すなわちこれを刀剣銘文の「ワカタケル大王」の「治天下」と結びつけて、王権支配の進展とともに倭国に独自の天下観が生まれ、その世界観と矛盾する中国王朝の天下からは主体的に離脱していった、とする理解である(西嶋 1985)。

この通説的理解には、倭国独自の「天下」観が形成されると、中国王朝の天下とは矛

盾するから、そこから離脱するために、中国王朝に対する遣使朝貢を廃止することは当然のこととする前提がある。けれども、倭国に先行し5世紀前半代に独自の「天下」観を形成した高句麗は、この時期、中国の冊封体制に参入し続けており、6世紀前半に独自の「天下」を形成する新羅でも、同時期に中国との交渉を開始している。すなわち、当時の東アジアにおいては、中国の天下に参入したまま独自の「天下」を構想することが十分にあり得たのである。実際、武王も、471年以前に大王の「治天下」を成立させながら、478年に自らを宋の天下の一隅に位置づける上表文を奉呈しているし、479年には宋にとってかわった南斉にも遣使を行ったとみられる（田中 2013）。

ここで留意したいのは、この頃、倭国にとって対中外交の維持が困難な客観的条件が存在したことである。北魏は466年に淮北を、469年に中国南朝から山東支配を奪い、480年代初頭にはその支配を淮南にまで延ばした。これにより南朝の権威失墜は明確となり、倭国の遣使ルート確保も困難となった（川本 1998）。実際、武王は、471年以前に即位しながらしばらく遣使を行わず、上表文でも百済経由での遣使に困難があると訴えている。倭国にとってそれは単なる交流ルートの問題ではない。南朝が、倭国の内政に直結する朝鮮半島情勢、なかでも高句麗への牽制において、ほとんど影響力のない存在となったことを意味するからである。つまり武の時代、高句麗との結びつきの強い北魏の勢力拡大により、倭王権は内外政治を展開する上で重要な後ろ盾としてきた中国南朝を失いつつあった。筆者はこうした王権の直面する困難が、当時の朝鮮半島情勢の混乱やこれと結びついた首長間対立と相まって、ワカタケル、すなわち武の時代頃から、高句麗の「太王」の「天下」をモデルに、「大王」の「天下」を構想した重要な背景の一つになっていたと考える（田中 2013、2019）。結局、北魏と友好的な関係を築く高句麗は、475年に百済の王都漢城を攻略し、その後しばらく百済王権は衰弱し、武王の抱えた対外的な課題は6世紀の王権に引き継がれていく。

むすび

倭の五王の南朝遣使の開始と終焉の時期やその背景をまとめると、次のようになる。倭王を結集核として展開した支配層の朝鮮諸勢力との交流関係は、5世紀に入り高句麗の圧倒的優勢のもとに圧迫され不安定化した。このなかにあつて倭王は、中国南朝との交流ルートが確保される環境が整った413年、東晋に遣使朝貢し、朝鮮半島との交流関係と密接不可分な倭国の政治体制を、南朝の権威のもとで維持・安定化しようとはかる。こうして宋の時代になると、讃が「安東將軍・倭国王」への除正を根拠に將軍府を開き、次の珍は、自身の臣僚にも將軍号を仮授しその除正に成功して、中国官爵を利用した僚属性的秩序を発展させた。5世紀半ばになると、朝鮮半島情勢の変動と連動し、旧来からの有力首長層の間で対立が深刻化して王統も切り替わる。ここにおいて即位した済は、「倭」姓を名乗り前代倭王と中国南朝との関係を継承し、郡太守号を取り入れ、人制も導入して、列島各地の首

長層を王権の政治秩序に積極的に取り込んだ。しかし武の時代、権威も領域も縮小した中国南朝は倭王権の十分な後ろ盾とはなりえず、そのなかで高句麗の「太王」の「天下」をモデルに、「大王」の「天下」を構想していったのであろう。

【参考文献】

- 石井正敏 2005 「5 世紀の日韓関係―倭の五王と高句麗・百済―」 『日韓歴史共同研究委員会報告書』 第一期第一分科(古代)
- 池田温 2002 『東アジアの文化交流史』 吉川弘文館
- 井上直樹 2020 「5 世紀後半の百済の王権構造」 上野祥史編 『東アジアと倭の眼でみた古墳時代』 〈国立歴史民俗博物館研究叢書 7〉 朝倉書店
- 川本芳昭 1998 『魏晋南北朝時代の民族問題』 汲古書院
- 木村誠 2004 『古代朝鮮の国家と社会』 吉川弘文館、初出 1992
- 坂元義種 1978 『古代東アジアの日本と朝鮮』 吉川弘文館
- 坂元義種 1981 『倭五王―空白の五世紀―』 教育社
- 武田幸男 1975 「平西将軍・倭隋の解釈」 『朝鮮学報』 77
- 田中史生 2005 『倭国と渡来人』 吉川弘文館
- 田中史生 2013 「倭の五王と列島支配」 大津透他編 『岩波講座 日本歴史』 巻 1、岩波書店
- 田中史生 2023 「秦氏と宗像の神―「秦氏本系帳」を手がかりとして」 『「神宿る島」 宗像・沖ノ島と関連遺跡群特別研究事業 成果報告書』 (「神宿る島」 宗像・沖ノ島と関連遺跡群保存活用協議会)
- 西嶋定生 1985 『日本歴史の国際環境』 東京大学出版会
- 橋本増吉 1956 『東洋史上より見たる日本上古史研究』 東洋文庫

表1 中国史書にみる倭の五王（田中 2013）

西暦	内容	出典
413	是歳、高句麗・倭国及び西南夷銅頭大師、並びに方物を献ず。	『晋書』安帝紀
	晋の安帝の時、 <u>倭王讃</u> 有り、使を遣わし朝貢す。	『南史』倭国伝
	晋の安帝の時、 <u>倭王贊</u> 有り。	『梁書』倭伝
421	詔して曰く、「 <u>倭讃</u> 萬里貢を修む。遠誠宜しく甄すべく、除授を賜ふ可し」と。	『宋書』倭国伝
	二月乙丑、《中略》倭国、使を遣わし朝貢す。	『南史』宋本紀
425	<u>讃</u> 又司馬曹達を遣わし、表を奉りて方物を献ず。	『宋書』倭国伝
430	(春正月)是の月、 <u>倭国王</u> 、使を遣わし方物を献ず。	『宋書』文帝紀
438	(夏四月)己巳、 <u>倭国王珍</u> を以て <u>安東將軍</u> と為す。《中略》是の歳、武都王・阿南国・高麗国・倭国・扶南国・林邑国並びに使を遣わし方物を献ず。	『宋書』文帝紀
	<u>讃</u> 死して弟 <u>珍</u> 立つ。使を遣わして貢献す。自ら <u>使持節・都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭国王</u> と称し、表して除正せられんことを求む。詔して <u>安東將軍・倭国王</u> に除す。 <u>珍</u> 又倭隋等十三人を <u>平西・征虜・冠軍・輔国將軍号</u> に除正せられんことを求む。詔して並びに聴す。	『宋書』倭国伝
443	是歳、河西国・高麗国・百済国・倭国並びに使を遣わし方物を献ず。	『宋書』文帝紀
	<u>倭国王済</u> 、使を遣わし奉献す。復以て <u>安東將軍・倭国王</u> と為す。	『宋書』倭国伝
451	秋七月甲辰、安東將軍倭王 <u>倭済</u> 、号を <u>安東大將軍</u> に進む。	『宋書』文帝紀
	<u>使持節・都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事</u> を加え、 <u>安東將軍</u> は故の如し。並びに上の所の二十三人を <u>軍・郡</u> に除す。	『宋書』倭国伝
460	(十二月)丁未、倭国、使を遣わし方物を献ず。	『宋書』孝武帝紀
462	(三月)壬寅、倭国王世子 <u>興</u> を以て <u>安東將軍</u> と為す。	『宋書』孝武帝紀
	<u>済</u> 死す。世子 <u>興</u> 、使を遣わし貢献す。世祖の大明六年、詔して曰く、「 <u>倭王世子興</u> 、奕世、忠を戴ね、外海に藩と作る。化を稟け境を寧んじ、恭しく貢職を修む。新たに辺業を嗣ぐ。宜しく爵号を授け、 <u>安東將軍・倭国王</u> とすべし」と。	『宋書』倭国伝
477	冬十一月己酉、倭国、使を遣わして方物を献ず。	『宋書』順帝紀
478	五月戊午、 <u>倭国王武</u> 、使を遣わし方物を献ず。武を以て <u>安東大將軍</u> と為す。	『宋書』順帝紀
	<u>興</u> 死して弟 <u>武</u> 立つ。自ら <u>使持節・都督倭百済新羅任那加羅秦韓慕韓七国諸軍事・安東大將軍・倭国王</u> と称す。順帝の昇明二年、使を遣わし上表して曰く、《中略》詔して <u>武</u> を <u>使持節・都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭王</u> に除す。	『宋書』倭国伝
479	新除の <u>使持節・都督倭新羅任那加羅秦韓六国諸軍事・安東大將軍</u> を進め、 <u>倭王武</u> の号を <u>鎮東大將軍</u> と為す。	『南齊書』倭国伝
502	<u>鎮東大將軍倭王武</u> 、号を <u>征東將軍</u> に進む。	『梁書』武帝紀

一瀬 和夫 (いちのせ かずお)

京都橘大学名誉教授／考古学、博物館学、古墳時代

Keyword：前方後円墳の林立・百舌鳥古市の巨大化
相対的な巨大化の頂点・絶対的な巨大化
の頂点と支配構造・円形原理の前方部4
階層化・ニサンザイ型系の踏襲



〔略歴〕

昭和32年（1957）大阪市生まれ。

関西大学文学部史学科卒業

博士（史学）関西大学

大阪府教育委員会事務局文化財保護課考古技師、近つ飛鳥博物館学芸員、京都橘大学教授経て、

現在、関西大学・立命館大学非常勤講師

〔主な論著〕

- ・『大王墓と前方後円墳』吉川弘文館、2005年
- ・『古墳時代のシンボル―仁徳陵古墳』新泉社、2009年
- ・『巨大古墳―仁徳朝の全盛』文英堂、2011年
- ・『百舌鳥・古市古墳群 東アジアのなかの巨大古墳群』同成社、2016年
- ・『博物館での展示と学び』アム・プロモーション、2020年
- ・『古墳を築く』（歴史文化ライブラリー）吉川弘文館、2023年（10月刊）

「倭の五王と百舌鳥・古市」

＊古墳の墳丘がもっとも増大したのは五世紀前半である。平坦な台地の上で周濠を掘って内方に土を盛ることで墳丘のかたちのイメージが正確に示された。周濠の外方は水をたたえるよう上面が平坦になるように堤を設けた。前方後円墳は単純な円と三角の組合せだが、その比率をかえることで時期や系譜、古墳間の格差が導き出される。百舌鳥・古市古墳群はそれを実践、展開する場になった。

＊平坦な施工面を確実に手に入れ、その周囲もきれいに整え、三段築成の墳丘の設計が中段の裾もしくは下段の上肩に、忠実に現地におとして描く。それは周囲に二重の幅広い堤までも設定するものもある。そうした古墳が大阪府南部、大阪湾に面した台地上に堺市百舌鳥、河内平野の外縁の丘陵端・台地上に藤井寺・羽曳野市古市の地に群をなしてつくられた。同時代の日本列島のほかの地域の古墳群を圧倒した。百舌鳥・古市古墳群の古墳築造年代後半期と宋書にある倭の五王の遣使の年代は重なり合う。

① 古市の津堂城山古墳と百舌鳥の乳岡古墳

前方後円墳の各地の林立と百舌鳥古墳群の出現

大規模開発に拠点化

古市と長原古墳群の專業層墓域の設定と百舌鳥と陶邑窯跡群の経営開始

＊乳岡古墳は100mをこえ、葺石・埴輪をもった本格派。百舌鳥の古墳が次々とつくられるまえは大阪湾に船が入ったときに、葺石の白がはえて石津川の河口をしめす灯台のような役割をはたす。ここから北東側の進路を選ぶと百舌鳥古墳群へ、南東側を選ぶと日本最古の大窯業生産地帯である堺市陶邑窯跡群へたどり着く。

② 仲津姫陵・履中陵古墳の巨大化

2大巨大古墳群による新たな支配体制ネットワークの確立-造墓活動の往来

仲津姫陵・履中陵古墳の巨大化にともなう相対的な階層性と古墳の規制

田中塚のいう「衛星式陪塚」の顕在化

＊百舌鳥・古市古墳群はいろいろな種類の古墳が集まるが、大型墳の周囲では陪塚と称される中小古墳が5世紀前半にさかんにつくられた。これは古墳群の重層性をより明確にし、特に、衛星式陪塚としたものは主墳を中心に接して平面分布する。集団関係の状況におうじて、前方後円墳の前方部の縮小・省略、または方墳へと墳丘規制-きめ細かい集団関係の親密度による格差づけ

平野周縁に手工業基地を設定

特化された地域：百舌鳥・古市-佐紀、馬見-三島、山城、伊勢、紀伊-吉備、上野、日向

＊百舌鳥古墳群の履中陵・仁徳陵古墳といった超広域型、大王墓が大阪湾にそって南北にならぶのに対して、百舌鳥の地に東西にならぶ、広域地域型（和泉＋上町台地）の堺市乳岡・大塚山・イタスケ・御廟山古墳と4代つづく系譜。この系譜は、日本列島各地が帆立貝式・円墳化して墳丘規模をおとす同時代の古墳に対して、墳丘長150mを維持して優勢を誇った（乳岡系譜）。石津川に合流する百済・百舌鳥川の両岸に分布。

③ 応神陵古墳と吉備の造山古墳

相対的な墳丘の巨大化、小形方墳群の造墓活動が活発化

応神陵古墳と吉備の造山古墳、軍団の形成（短甲のレディメイド化による大量生産）

手工業基地と造墓の大規模化

平野の灌漑と台地と馬利用の東西陸路の開発

＊応神陵古墳を西流する大水川は、飛鳥川が石川と合流するあたりから端を発する。その流れを曲げてまで、すぐ下流、平野に流れ出る水源のような谷位置に「応神陵

古墳」がつくられた。墳丘本体は国府台地の西端、微高地に墳丘本体をのせ、内濠の東側はおもに掘削によりつくり出し、西側は台地下にあった大水川の河芯を取りこんだ。西側はそのため、ただでさえ低い堤部分に大幅に盛土で形づけるだけでなく、大水川を西側に幅広い外堤を設けてその西に大きく迂回させた。

応神陵古墳墳丘付加と周囲の古墳の墳丘規制

＊応神陵古墳の前方部北西に藤井寺・羽曳野市の二ツ塚古墳系列。応神陵古墳に先行して墳丘長 110mの前方後円墳が築かれ、その後、この系列は、盾塚古墳の帆立貝式古墳化から、応神陵古墳に併行する蔵塚古墳の円墳、珠金塚古墳の一辺 30mの方墳にまで小さくなる。その立地から、石川流域との関係が強いとみられ、徐々に規制が強められた近親集団のもの。さて、応神陵古墳の西側側面には藤井寺市アリ山古墳。1542 本の鉄鏃を中心に武器・農工具を大量埋納する方墳。左右対称の位置に一辺 45mの同規模の栗塚古墳。いずれも築造位置に応神陵古墳との計画性があることは同じ埴輪が立つことから分かる。

④ 仁徳陵古墳の築造と集落配置

墳丘規模の絶対的な階層化、全体の墳形が円丘原理への移行とそれに伴う規制
人物埴輪配置方式の確立

河内・和泉の空間支配コンプレックスの形成

＊巨大な大阪市法円坂倉庫群がある上町台地の先端を中心点として大前方後円墳をつくった統治構成要素と配置関係を模式化してみる。中心点から 1 日で余裕をもって往復可能な距離の半径 5 ～10km圏内には、大王に直接的な居館と倉庫群といった統治ラインと平野を利用した農作地や牧といった生育ライン、付随する集落は、中心点をかこむ警護の外郭を兼ねる。直接的なキャッチメントエリアに相当。さて、その周囲は 1 日でかろうじて往復可能な半径15kmと、1 日で到達可能な30kmとがある。そのエリアに台地と山地を利用した埴輪工房を併設する造墓ライン、森林資源近くに鉄鍛冶や武器の製造などの手工業ライン、その背後には須恵器工房といった大型化した手工業ラインがひろがる。つまり、ここにはまず大王の直接的な日常生活と蓄えをまもる範囲がある。その中心部を囲う農作業を管理する地域首長からなる環境帯、その外郭は古墳時代に特殊・明確化されていく場。灌漑を保証する平野に面した周囲の導水祭祀と庭的な広場、高台に巨大な墳墓をおく、鍛冶工房や須恵器窯などの手工業が森林に面して展開され、それぞれが同心円状に間隔をおいて制御、配置。このシステムは次段階まで機能。

墳丘増大以外にさまざまな支配手法を探る

- 1) 手工業センター（須恵器・鉄鍛冶・金工・馬・塩の定型）、2) 倉庫群、
- 3) 同型鏡群、4) 鉄剣・刀

<同型鏡群拡散 1 段階（辻田）>出現

⑤ ニサンザイ・允恭陵古墳墳丘の縮小

外濠や下段葺石など付加的要素の減少、木製品・埴輪の縮小、衛星式陪塚の減少

允恭陵古墳は応神陵古墳を中心の古墳分布「外縁」に築造（白鳥陵・仲哀陵古墳も同じ）

須恵器の斉一的な波及拡散、手工業基地の安定化、消費財でなく確実な財の継承

東西大道の確立（仁徳陵-応神陵間）

乳岡系譜広域地域集団の解体、多様な性格をもつ小形均質墳による小地域ごとの集中

千葉県市原市稲荷台 1 号墳「王賜」銘鉄剣

* 田中良之は 5 世紀中葉までは血縁関係がある成人男女が埋葬されることが多く、血縁を重視した双系キョウダイ原理にもとづいた埋葬であったとする。これは百舌鳥古墳群のニサンザイ古墳築造までは大王墓級のものでもつづいた。

円形原理の前方部 4 階層化

- * 1) 後円部径で前方部幅を割った指数が 1.4 前後、2) その指数が 1.0 前後、
- 3) その指数が 0.6 前後の帆立貝式、4) 前方部をもたない円墳（この格差は 5 世紀の間はこの規制は有効）

大型墳築造ピッチの減衰

* 大王墓として、ニサンザイ古墳は墳丘長 300m をかろうじてたもった。以降、それ以上の規模は 335m の河内大塚、331m の榎原丸山古墳のみで 60 年に 1 基の築造ペース。200m 級は、允恭陵・白鳥陵・仲哀陵・今城塚古墳で 25 年に 1 基ペース。総じて、20 年に 1 基のペース。

⑥ 白鳥陵古墳・ニサンザイ型系の踏襲へ

衛星式陪塚の消滅

巨大古墳築造地の移動（百舌鳥古墳群の大型墳築造は終了）

中期大型古墳群段階（契機 3）の終了と小地域型小形前方後円墳・円墳の登場

親族集団墓域を基礎とする田中良之の言う「族墓」的古墳群の形態の終了

大阪府柏原市高井田山古墳の「磚積み横穴式石室」夫婦墓の存在

古墳外縁の白鳥陵古墳の造墓と古市上流域の開発

* 石川からの分岐点と応神陵古墳の間にある白鳥陵古墳から西にむかって、今、古市大溝とよばれる堀割。南北の台地・丘陵を東西方向に幅 20m をこえる直線にはしる溝の痕跡。輪郭が残る幅広いものは仲哀陵古墳の南側にも。羽曳野丘陵を東西に横断して切断。この溝に関連する地点の発掘調査では、5 世紀中葉の青山 2 号墳、5 世紀末の軽里 4 号墳、6 世紀初めの矢倉古墳の堤や周濠をつぶして大溝を掘削。今のところ、古市古墳群にある大溝は飛鳥時代以降の開削。この溝で

直接に恩恵をこうむるのは溝よりひとつ下の段に立地し、飛鳥時代以降に大きく集落が展開するエリア。はさみ山遺跡や北岡遺跡などで検出される寺院関係施設や官衙建物。

＜同型鏡群拡散 2 段階（辻田）＞副葬ピーク

⑦ 河内大塚山古墳という墳丘型式

ニサンザイ型系大形前方後円墳の系譜

日本列島東西の鉄剣・刀文字象眼銘の製作と関係

埼玉県市行田市埼玉稲荷山古墳「杖刀人、辛亥年（471）」銘鉄剣-軍事

熊本県和水町江田船山古墳「典曹人」銘鉄刀-文書

野石の横穴式石室の可能性

群馬県前橋市前二子古墳の中国系（長方形プラン）横穴式石室

古市古墳群での 2 基一対の単独立地

＊古市では、仲哀陵古墳以降の大型墳は中規模墳と 2 基で対をなす。仲哀陵古墳の北に鉢塚、仁賢陵古墳の南に峰ヶ塚、安閑陵古墳の南に皇后陵、清寧陵古墳の東に小白髪山古墳。

大王級古墳のニサンザイ型系の築造相対順位からの河内大塚古墳の位置づけ

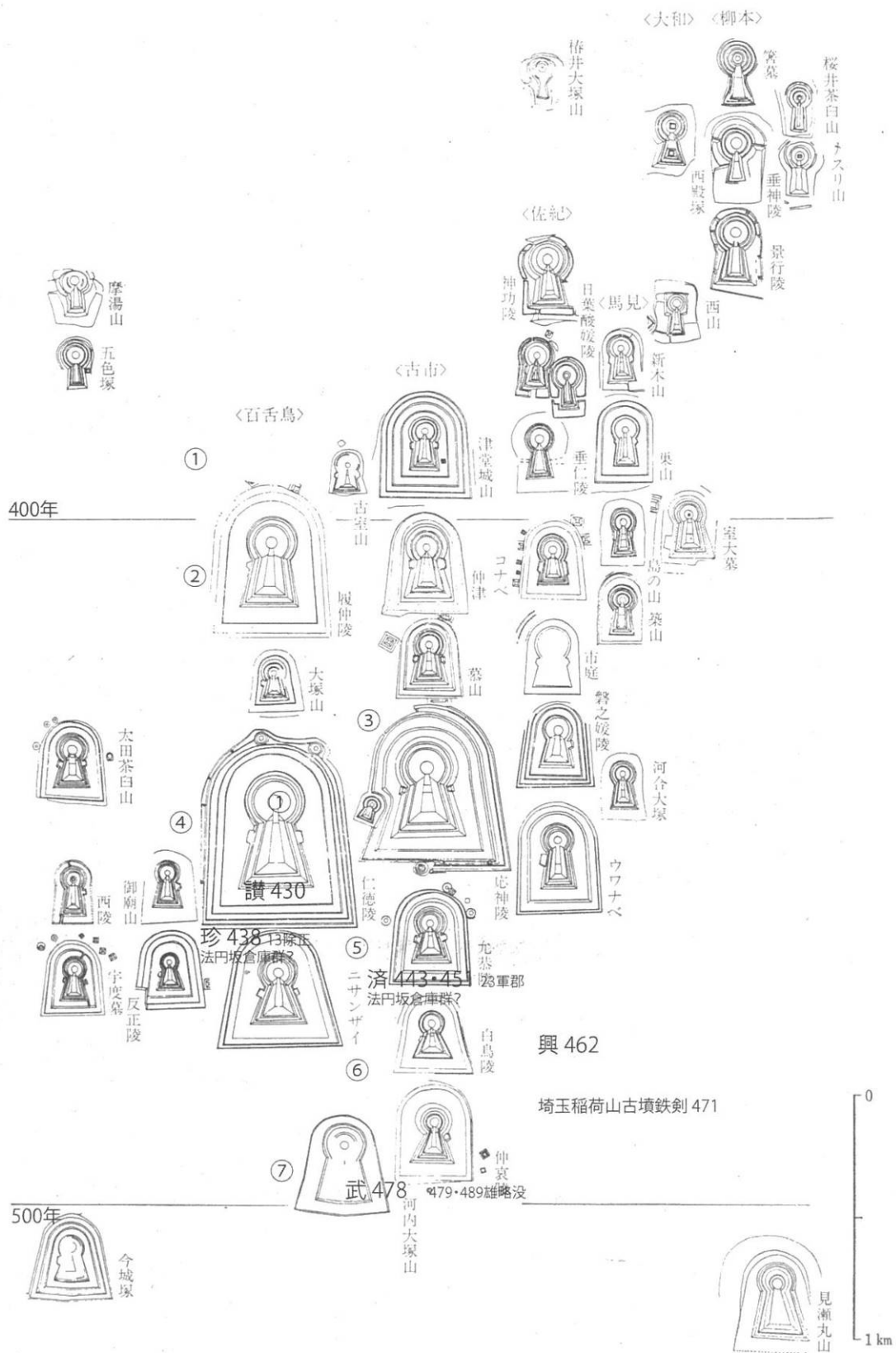
＊円筒埴輪から、ニサンザイ・允恭陵・白鳥陵・仲哀陵・今城塚という順は誤りない。これにもれる河内大塚・橿原丸山古墳は今のところ明確な埴輪の出土がないが、埴輪生産が前方後円墳の終焉まで続くことから、埴輪の有無が時期決定の根拠にはならず、この順位のなかに含まれる。墳丘主導類型からすれば、橿原丸山古墳は今城塚古墳の後。今城塚古墳は白鳥陵古墳と同じ相似形のもので、2/3 となり規模と比率は近似。ニサンザイ古墳との類似は比率では今城塚古墳。実寸法では長さが河内大塚古墳に近く、周濠・溝の輪郭も似る。ニサンザイ・今城塚・橿原丸山古墳とも造出し位置が一致。全体に、墳丘まわりの類似度からすれば、古いニサンザイ古墳から、河内大塚・今城塚・橿原丸山古墳の順。総じて順次、前方部を増大させていく変化など、わずかずつの変化をとめないながら、その直前の墳丘をモデルに従いつつ、墳丘が築かれていった。これらはニサンザイ型系という墳丘形態としてまとめることができ、この墳丘設計は 5 世紀中葉～6 世紀後葉までの 120 年ほど踏襲し、世襲的に存続しようとしたことに意義がある。

『巨大古墳の出現-仁徳朝の全盛』文英堂 2011 年

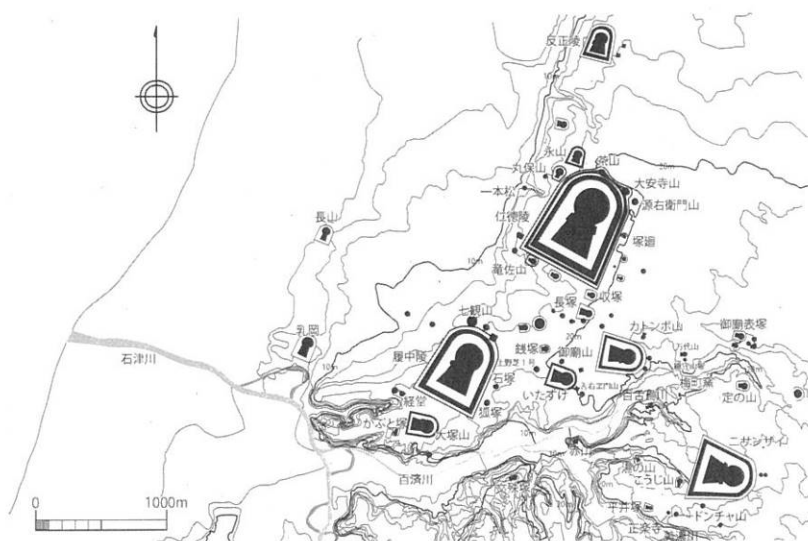
『百舌鳥・古市古墳群-東アジアのなかの巨大古墳群』同成社 2016 年

『古墳を築く』吉川弘文館 2023 年より

0 畿内 160m以上の大形前方後円墳の変遷



①百舌鳥・古市古墳群古墳分布図



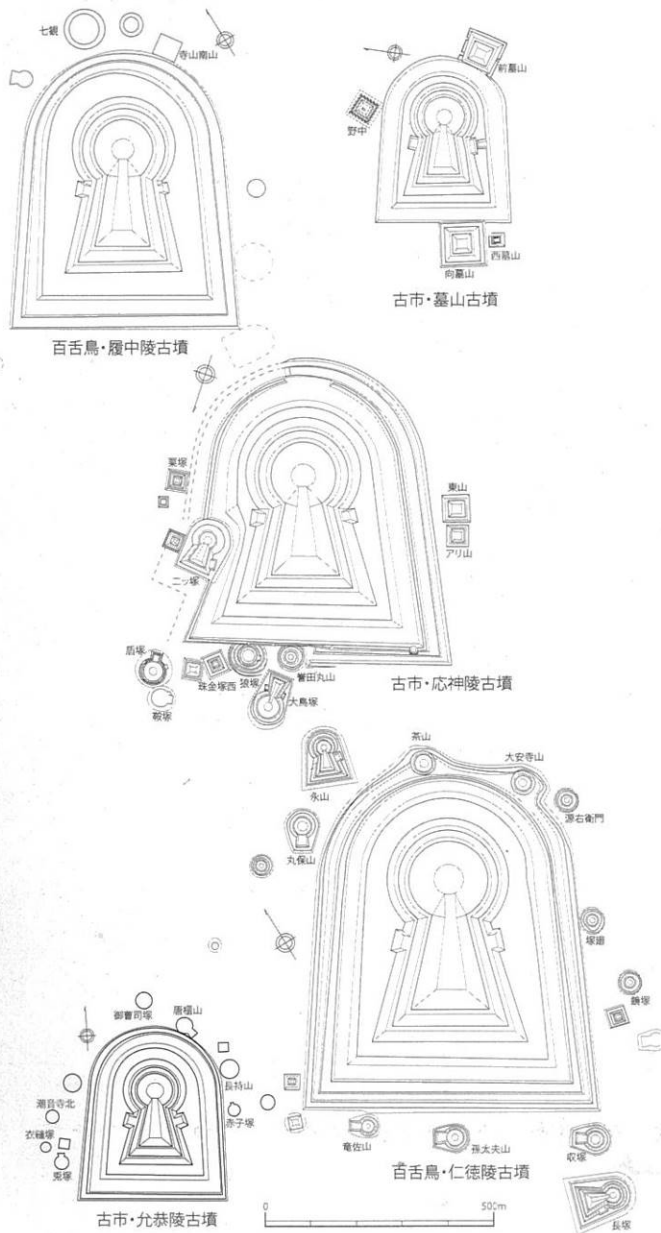
百舌鳥古墳群



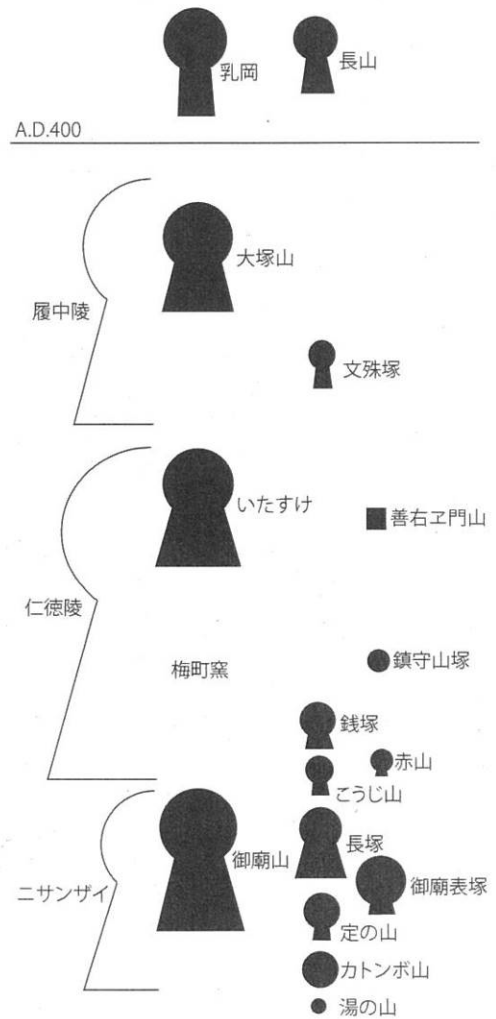
古市古墳群

②百舌鳥・古市の主な衛星式陪冢変遷

百舌鳥大王級古墳と広域地域型（和泉＋上町台地）乳岡系譜の古墳



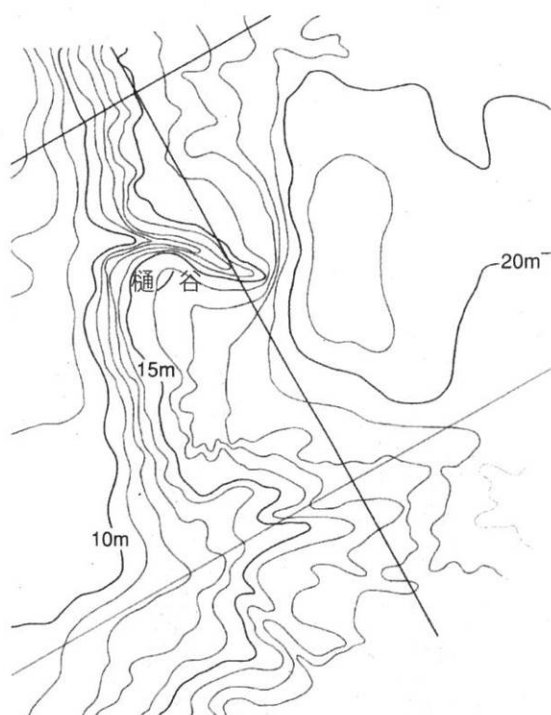
衛星式陪冢



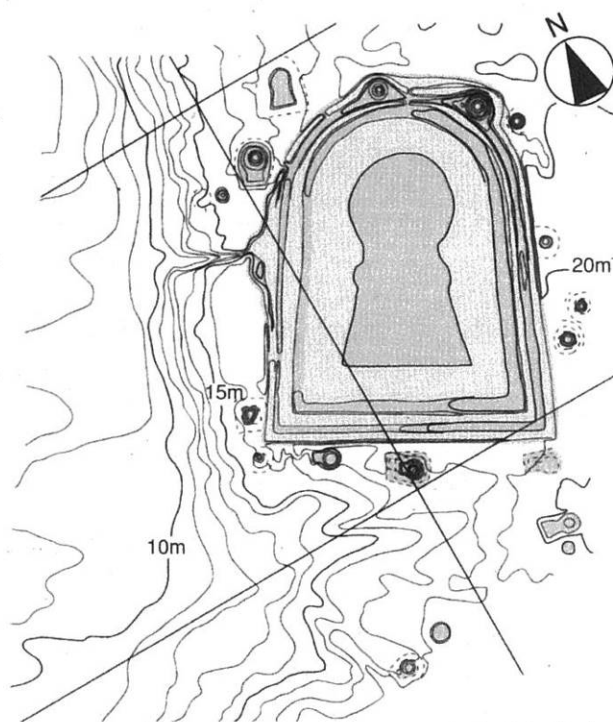
A.D.500

大王級系譜と乳岡系譜

③ 応神陵・仁徳陵古墳の築造前後



築造前

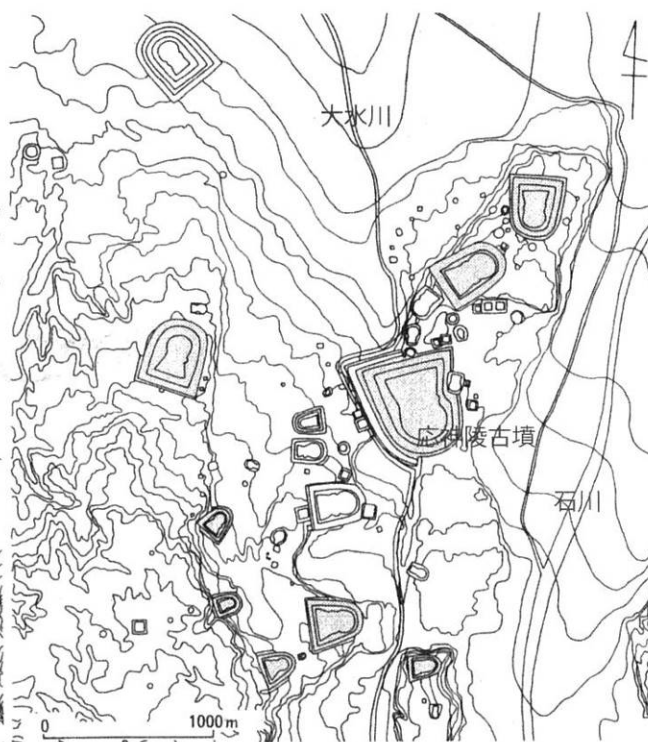


築造後

仁徳陵古墳



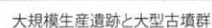
築造前



築造後

応神陵古墳

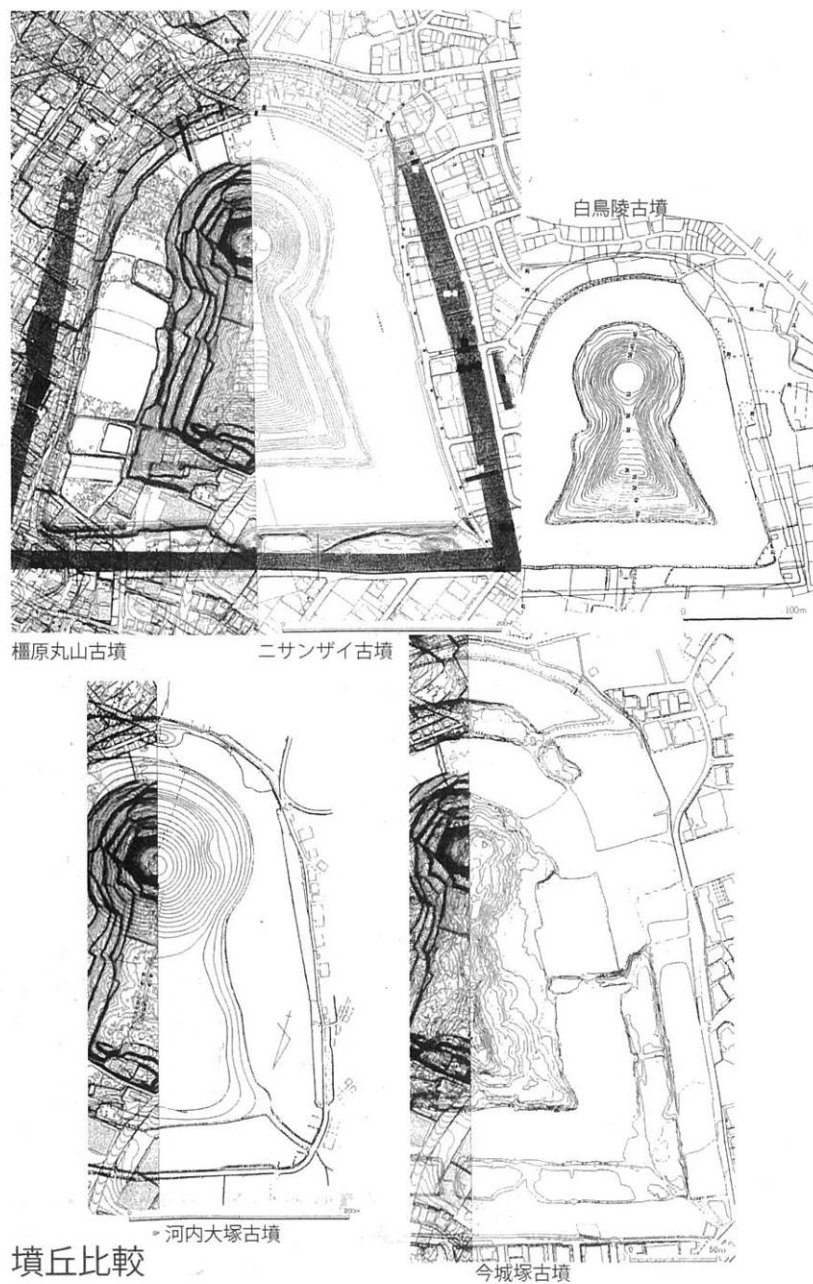
百舌鳥・古市と古道



支配空間環境構成模式



⑥⑦ニサンザイ型系大形前方後円墳の変遷と墳丘各部数値表



ニサンザイ古墳以降の主要墳丘各部の比率と規模

ニサンザイ古墳以降の主要墳丘各部の比率と規模																									
古墳名	類型	E類 系比	墳長 幅 濠幅 墳丘				(m)			後円部径			(m)			前方部幅			(m)			周濠 長	周濠 幅	高さ (m)	参考文献
			幅比	／径	／ 径	／長	長	下段 裾	中段 裾	上段 裾	下段 裾	中段 裾	上段 裾	下段 裾	中段 裾	上段 裾	(m)	(m)							
																			(比率)						
ニサンザイ	E	E1	1.27	1.76	1.39	0.97	300	258	222	170	130	92	236	184	126	394	384	28	堺市2008						
允恭陵	C		1.44	1.64	1.14	0.79	230	194	165	140	100	70	160	118	78	299	237	24	藤井寺市2015						
白鳥陵	E	E2/3	1.21	1.89	1.56	1.04	200	170	149	106	90	72	165	131	96	270	282	20	藤井寺市2015						
仲哀陵	C		1.33	1.63	1.23	0.77	242	205		148	115		182	118		350	268	21	藤井寺市2015						
河内大塚	E	E1	1.45	1.78	1.22	0.88	320			180			220			400	350	20	末永雅雄1975						
今城塚	E	E2/3	1.27	1.86	1.47	0.98	190			102			150			250	244	15	高槻市2004-8						
榎原丸山	G	E1	1.23	1.92	1.56	0.99	331	289	244	173	132	101	270	210	142	404	401	25	一瀬2012						
両宮山	C		1.49	1.78	1.19	0.82	206			116			138			260	214	24	宇垣2006						
断夫山	D	E1/2	1.3	2.00	1.50	0.95	160			80			120			200	190	13	深谷2015						

古市 晃 (ふるいち あきら)

神戸大学大学院人文学研究科 教授／日本古代史、国家形成史、地域社会史

Keyword：倭王・王族・王宮・中枢部王宮群・周縁部
王宮群・中枢王族・周縁王族・伝承・古事記・日本書紀



〔略歴〕

昭和 45 年（1970）岡山県岡山市生まれ。
岡山大学文学部卒業 大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程退学
博士（史学）大阪市立大学
大阪市文化財協会調査員、大阪歴史博物館学芸員、花園大学文学部准教授などを経て、
2009 年（平成 21）より神戸大学に着任。

〔主な論著〕

- ・『日本古代王権の支配論理』塙書房、2009 年
- ・『国家形成期の王宮と地域社会—記紀・風土記の再解釈』塙書房、2019 年
- ・『倭国 古代国家への路』講談社現代新書、2021 年
- ・「ニホツヒメ・住吉大神伝承と紀伊・播磨」『古墳と国家形成期の諸問題』白石太一郎先生傘寿記念論文集編集委員会編 山川出版社、2019 年
- ・「『出雲国風土記』の神統譜と古代出雲の地域統合」『出雲古代史研究』30、2020 年
- ・「日本古代における伝承と史実の間——オケ・ヲケ伝承を手がかりに——」『纏向学の最前線——桜井市纏向学研究センター設立 10 周年記念論文集——』2022 年
- ・「古代地域社会論の現状と課題」『歴史科学』250、2022 年

「倭の五王の時代の王宮と社会」

はじめに

西暦 5 世紀にあたる倭の五王の時代について、列島社会の様相を明らかにする文献史料はきわめて乏しい。かつて盛んに用いられた『古事記』『日本書紀』（以下、記紀）は、これまでの長い研究の積み重ねによって、天皇の統治の正当性を主張するための歴史観に基づく多くの造作が含まれていることが明らかにされており、近年では記紀から 5 世紀、また 6 世紀の歴史の実態を見出そうとする研究はほとんどみられない。

一方、刀剣などの考古資料に刻まれた銘文や、中国をはじめとする外国の歴史書に記された情報など、比較的正確な史料に基づく検討が進められているが、情報量は少なく、細部にわたる検討は難しいといわざるを得ない。

こうした状況を克服するためには、記紀や諸国の風土記に記された系譜や伝承を読み解き、造作の素材として用いられた「古層」を示す情報や、造作の慮外に置かれた情報

を析出する試みが必要となる。このような、記紀や風土記などから得られる、比較的信頼できるデータを積み重ね、必要に応じて出土文字資料や外国の歴史書と比較検討を行うことによって、5世紀の列島社会像をもう一度明らかにする試みが求められているのである。

1. 5世紀の王宮

5世紀の列島社会、とひとくちに言っても、何を手がかりに明らかにすべきなのかが問題となる。考古学による研究では、前方後円墳を中心とする王陵研究が着実に進展している。5世紀の中央支配権力の質を検討する際には、こうした古墳研究の成果に基づき、その専制的性格を積極的に評価する傾向があるように思われる。

一方、王陵と共に権力の性格を表すと思われる王宮については、一部を除いてほとんど手がかりが得られてない。王宮比定地の発掘調査は脇本遺跡(奈良県桜井市)などに限られているし、記紀にみえる王宮名(宮号)は7世紀後半にまとめて造作されたことが明らかにされている。

そこで筆者は、5・6世紀の王族名に居地を示す地名が多く用いられている事実に着目し、王名から王宮所在地を解明する作業を行った。王名は王宮名を伝えるために記されたわけではなく、王名の一部として用いられる地名が造作された可能性は低い。王名から王宮名を探ることで、記紀の造作の意図とは直接かかわらないところから、王宮所在地を明らかにできる可能性を持っているのである。

こうした作業を経て明らかになった5世紀の王宮所在地は、奈良盆地東南部を中心としつつ、同盆地北部から京都盆地南部、さらには大阪湾岸に及ぶ(図1、表1)。これまで、記紀の宮号から推定されてきた王宮所在地は、奈良盆地東南部と大阪湾岸の一部に限定されたものだったから、王名に着目することで、5世紀の王族の拠点は、従来考えられてきたよりも広域に展開していたことが明らかになった。

この王宮分布のあり方は、王名と共に、王宮や王族に奉仕する人びと(名代・子代)のあり方に注目することで、その特徴をさらにくわしく明らかにすることができる。5世紀の王宮群の中で、長谷(はつせ)(奈良県桜井市)、磐余(いわれ)(同)、石上(いそのかみ)(同県天理市)の3地域の王宮については、王族一般ではなく、いずれも倭王宮として用いられ、長谷部、磐余部、石上部という、王宮そのものに奉仕する人びとが存在していたことで、ほかの王宮とは区別された、特別な位置にあったことが確認できる(表2)。つまり、5世紀の王族たちは、大和、山背、河内という広域に拠点を維持しつつも、一方で長谷、磐余、石上という奈良盆地東南部の王宮については倭王宮として継続的に利用しようとする意志を持っていたといえる。これまで、飛鳥時代以前の倭王宮について、記紀の宮号が天皇ごとに異なることから、天皇の代替わりごとに宮を移動するという、歴代遷宮という理解があったが、そうしたあり方は存在しなかったことが

明らかである。

それに対して、奈良盆地北部や京都盆地南部、大阪湾岸に置かれた王宮群は、一時的な利用に終わったり、倭王宮として利用された形跡がない。例外は仁徳の難波高津宮(なにわのたかつのみや)だが、少なくとも仁徳の名、大鷦鷯(おおさざき)と難波の宮名は対応しないし、鷦鷯の名を持つ他の王族が、いずれも奈良盆地東南部に王宮を置いていることからすれば、仁徳の王宮もまた奈良盆地東南部にあった可能性が高い。記紀には仁徳に叛逆した雌鳥女王(めどりのひめみこ)、隼別王(はやぶさわけのみこ)の逃亡譚が記されるが、彼らの逃亡の起点は奈良盆地東南部の倉梯(くらはし)とされ、難波とはなっていない。

つまり5世紀の王宮群は、奈良盆地東南部に置かれた、倭王宮を含む重要な王宮群(図2)と、それ以外の地域に展開する周縁的な王宮群に区分することができる。筆者は、前者を中枢部王宮群、後者を周縁部王宮群と呼び、その性格の相違を強調している。

ただ中枢部王宮群と周縁部王宮群には、見過ごせない共通点がある。その立地に注目するならば、5世紀の王宮は谷や丘陵部に作られ、平坦地に置かれた事例が確認できないことである。さらに、王宮は交通上の要衝に置かれたものが多い。長谷の王宮は大和と伊勢を結ぶ谷の中に、磐余の王宮は大和と河内を結ぶ要路に沿った丘陵上に置かれている。河内の日下や山背の氏の王宮もまた、こうした交通の要衝に沿って設置された。これらの状況は、5世紀の王宮が、みかけ上の壮麗さや執務のための利便性よりも、軍事的機能を優先させざるを得なかったことを示している(図2)。

2. 王族のあり方

王宮が分散的に配置されたことと、軍事的機能を優先させた立地であったことは、こうした王宮を拠点とする5世紀の王族たちの権力の性格を考えるうえで重要な論点を提起している。記紀には、宇治や佐保(奈良県奈良市)、住吉(大阪府大阪市)など、筆者が周縁部と評価する王宮が置かれた地に対応して、王族の叛逆伝承が記されている。とりわけ住吉では、応神に反旗を翻した忍熊王(おしくまのみこ)と麿坂王(かぐさかのみこ)、履中に対する住吉仲王(すみのえのなかつみこ)、同じ履中に対する鷲住王(わしすみのみこ)など、叛逆伝承が集中する。このことは、周縁部王宮群が置かれた奈良盆地北部や京都盆地南部、また大阪湾岸を拠点として、王族を名乗るもののかならずしも倭王とは親和的でない王族たちが存在していたことを示す。

さらに、記紀に垂仁天皇の子として記されるホムチワケ王(本牟智和気。誉津別とも)は、大和の添上郡佐保で生まれたとされるが、ホムチは大和国葛下郡品治郷にちなむ名であり、彼に奉仕するホムチ部(品治部)が実在したことからすれば、葛城を拠点とする王族であったと考えられる。垂仁とのつながりを示す系譜は信頼性が低く、ホム

チワケ王は元来、5世紀最大の雄族であった葛城氏出自の王族であった可能性が高い。

5世紀には、王族と豪族の境界はまだ明確ではなく、有力な豪族たちの中には、一時的にせよ王族を名乗ることができた人びとがいたものと思われる。記紀に雄略治世下とされる葛城一言主大神(かつらぎのひとことぬしのおおがみ)の伝承は、天皇とまったく同じく装束と隊列を従えた大神が葛城におり、一触即発の状況が生じたことを記すが、こうした伝承もまた、葛城の地に王族に等しい勢力が存在したことを示す可能性が高い。

王族同士の対立関係は、倭王を出す有力な王族の中にも存在した。記紀には、仁徳から履中、反正、その後は至る顕宗、仁賢を経て武烈まで続く仁徳系の王統と、仁徳の子とされる允恭から安康、雄略、清寧まで続く允恭系の王統が対立をくり返し、当初允恭系によって仁徳系の男性王族が、ほぼ全滅に近い弾圧を受けたことを記す(図3)。従来、こうした伝承はかならずしも史実とは考えられてこなかったが、先にみた王宮群の配置と立地は、5世紀の王族たちの間に深刻な対立が存在した可能性を示している。

こうした対立状況を理解するうえで、外国の歴史書から想定される倭国の王族のあり方は興味深い。『宋書』倭国伝には、421年から477年に至る、倭の5人の王(讃、珍、済、興、武)による宋への遣使が記されている。その中で、438年、倭王珍による遣使に際して、倭隋ら13人が平西、征虜、冠軍、輔国などの將軍号を叙され、それらが珍の叙された安東將軍と実質的な差異がなかったことが指摘されている。倭王と同じ倭姓を有する倭隋は王族であった可能性が高い。少なくとも宋の皇帝は倭の王族たちの間に大きな実力差を認めていなかったのであり、そのことは記紀の伝承が示す王族の対立関係が、ある程度信頼できるものであることを示している。

さらに、『宋書』は倭の五王たちの血縁関係を記すが、讃と珍が兄弟、済と興、武がそれぞれ親子とされるのに対して、珍と済の間には血縁関係が記されない(図4)。『宋書』が誤って血縁関係を記さなかったとする誤脱説もあるが、容易には認めがたい。

これと対応するのが、記紀にみえる仁徳系と允恭系の王統の対立伝承である。仁徳の子、履中、反正に続いて即位する允恭は彼ら二人の弟とされるが、允恭の子、安康は仁徳の子、大日下王を殺害し、その結果、大日下王の遺児、眉輪王は安康を殺害する。安康の弟、雄略は眉輪王を殺害し、さらに履中の子である市辺押磐王とその弟、御馬王をも殺害する。雄略と同世代で倭王位につく可能性のある王族は、仁徳系では絶えてしまうのである。仁徳系と允恭系の間の血縁家系は、実際には存在しなかったと考えるのが妥当であろう。

倭の五王と記紀の天皇との対応関係については、倭王武が雄略＝稲荷山古墳出土鉄剣銘にみえるワカタケル大王にあたることを定点として、興を安康、済を允恭とする点は諸説ほぼ一致している。讃と珍については諸説あるが、記紀の皇統譜との対応関係を重

視するならば、讃を履中、珍を反正とするのが妥当と考える。

ただいずれの天皇に比定するとしても、ここでは允恭即位を契機として、それまでの王統と血縁関係が断絶している可能性が高いことを重視すべきである。初代神武以来、すべての天皇が男系により嫡系継承されてきたとする記紀の系譜は事実ではない。仁徳系と允恭系が血縁関係を有さなかったことを前提とするならば、記紀にみえる允恭系王族の不自然な婚姻関係も、合理的に解釈できる。安康が仁徳の子、大日下王を殺害したのは、『日本書紀』によれば大日下王がその妹、若日下女王と雄略との婚姻を認めなかったとする讒言によるものとされ、その結果、安康側は大日下王を殺害して若日下女王を奪い、雄略妃としたことが記される。雄略は仁徳系の女性を強奪して妃としたことになるが、じつは4人みえる雄略の後妃の中で、3人までが相手の父や夫を殺害、弾圧によって強奪したものとされる（若日下女王。葛城円大臣の娘、韓媛。吉備上道臣田狭の妻、稚媛）。『日本書紀』は、雄略が仁徳系の反正の娘たちに求婚したところ、雄略が暴虐であることを理由に拒絶された、とする伝承を載せるが、こうした一見、史実とは認めがたい伝承も、両王統の対立関係を前提とすれば、一定の史実を反映している可能性もあるだろう。

さらに、雄略の兄弟の婚姻関係も特異である。兄である安康と木梨輕王は、共に同母キョウダイと婚姻関係を結んだことが記されるが（安康＝長田大娘女王。木梨輕王＝輕大娘女王。）（図4）、同母キョウダイ婚は古代社会でも禁忌の対象である。彼らの父、允恭は、5世紀の倭王としては例外的に王族や有力豪族を后妃とせず、地方豪族にあたる近江出自の忍坂大中姫一人が伝えられるのみである。

以上に素描した分析結果が示すのは、5世紀の王族が倭王を中心とする中枢的王族、彼らと対立関係を内包する周縁的王族に二分されていたこと、中枢的王族もまた対立し、相互に殺戮をくり返す不安定な状況にあったということである。倭王位につく条件として、血縁関係はいまだ絶対的ではなく、権威と実力がものをいう流動的な状況が、中央支配権力を規定していたのである。

3. 5世紀の中央支配権力の特徴

5世紀の列島社会と中央支配権力の関係をめぐっては、どのような理解が可能だろうか。先に、5世紀最大の雄族として葛城氏があることをみた。葛城氏は、その始祖とされる襲津彦(そつひこ)が、朝鮮半島から渡来人を招来する伝承がみえるなど、対外関係を主導する存在であったが、このことは、軍事と開発のために不可欠な鉄素材の供給を朝鮮半島に依存していた倭国の中で、葛城氏が占めた位置の重要性を物語るものである。葛城氏と共に、この段階の対外関係を主導したのは吉備及び紀伊の勢力であり、彼らは相互に連携して、なかば自立的な政治勢力を形成していたと考えられる。雄略によって強奪された吉備上道臣田狭(きびのかみつみちのおみたさ)の妻については、葛城氏

の出自とする異説があるほか（『日本書紀』）、葛城の勢力である葛木氏や鴨氏が、吉備地域に濃密に分布する。葛城と紀伊は紀ノ川の水運を通じて密接な関係にあった。吉備と紀伊については、新羅に派遣された紀小弓宿禰(きのおゆみのすくね)と、吉備上道采女大海(きびのかみつみちのうねめおおあま)が実質的な婚姻関係を結んだとする伝承がある（『日本書紀』）。五世紀の中央支配権力は当初、倭王を中心とする専制的な支配体制を作り得ていたわけではなく、倭王に対抗できる有力な対抗軸を内包する、分節的な状況にあった。このことは、王族の内部が中枢と周縁に分裂する状況と対応する。播磨や出雲など、諸国の風土記の伝承や、奈良時代以降の氏族分布は葛城や吉備、紀伊の勢力が地域社会の有力な勢力と結びつき、支配を行っていたことを物語る。播磨には吉備の勢力が広域に入り込み、出雲にもまた吉備や葛城の勢力が存在した。『出雲国風土記』にみえる物言わぬ神、アヂスキタカヒコ神は、本来、葛城の高鴨に祭られる神格であった。

地域社会にとって、葛城や吉備との接触は、鉄をはじめとする朝鮮半島からもたらされた先進素材を調達するうえで、重要な意味があった。地域社会との関係をみても、5世紀の中央支配権力は独占的な支配を展開するには至っておらず、分節的な関係が持続していた。

こうした関係が大きく展開を遂げはじめるのが、5世紀後半、雄略の治世である。記紀には、雄略が多く王族や豪族を弾圧する伝承が多くみえる。そのすべてが事実かどうかは慎重に見きわめる必要があるが、注目されるのは、弾圧の対象に一定の傾向があることである。王族としては、すでにみたように仁徳系、豪族としては、葛城、吉備、紀伊の勢力である。葛城氏に対しては、葛城円大臣(かつらぎのつぶらのおおみ)が、安康を殺害した眉輪王(まゆわのみこ)をかくまったため殺害し、その所領と娘(韓媛(からひめ))を奪ったとする。吉備の勢力に対しては、吉備上道臣田狭を新羅に追い、その隙に妻の稚媛(わかひめ)を奪ったとされる。また雄略に対して叛意を抱いていた吉備下道臣前津屋(きびのしもつみちのおみさきつや)を、兵を派遣して殺害したとされる。紀伊に対しては、紀氏の同族、坂本臣の祖とされる根使主(ねのおみ)が、大日下王を讒言し、その礼物を奪ったことをとがめ、殺害したとされる。

互いに同盟関係を築いていたとみられる葛城、吉備、紀伊の勢力の弾圧伝承が、同じ雄略の治世下とされることは偶然ではないだろう。雄略は、王族に対しては仁徳系王統を、豪族に対しては葛城、吉備、紀伊の連合体を弾圧することで、允恭系王統の権力の確立を図ったのだと思われる。

よく知られるように、雄略にあたるワカタケル大王の名を刻んだ刀剣が列島の東西から出土し（埼玉県稲荷山古墳、熊本県江田船山古墳）、雄略（倭王武）が宋に送った上表文には、倭王が先祖代々、おそらくは朝鮮半島諸国(海北九十五国)を含む、列島とその周辺地域を平定したことが誇示される。

こうした状況から、雄略の王権について、その専制的性格を積極的に評価する見解がある。たしかに、雄略治世下で中央支配権力の統合が強力に推進されたことは否定できない。また同じ頃、官僚制的な支配システムが成立し始めていたことも指摘される。倭の五王やその臣下たちが宋の皇帝から賜与された將軍号に基づく、府官制という支配制度が導入され、また杖刀人(じょうとうじん)(稻荷山古墳出土鉄剣銘)、典曹人(てんそうじん)(江田船山古墳出土大刀銘)のように、職務に応じて人びとを何々人に任じる、人制という支配制度が成立していたことも指摘されている。

ただ府官制や人制がどの程度まで整った制度であったかについては慎重な検討が必要である。6世紀に成立する部民制のような、あらゆる職務を包摂する総合的な制度には発展していたとは思えない。

また葛城や吉備の勢力の弾圧も、雄略の段階では十分ではなかった。雄略が逝去すると、子の清寧が後を継ぐ。その際、勃発したのが星川王の乱である。雄略と、雄略が吉備上道臣田狭から奪った稚媛との間に生まれた星川王が即位をめざして叛乱するが、稚媛と共に殺害されたとされるものである。『日本書紀』は、この時に吉備と紀伊の勢力(星川王の異父兄、兄君(えきみ)と、吉備上道臣の水軍、城(紀)丘前来目(きのおかざきのくめ))が荷担したことを伝えている。星川王の乱は、中央支配権力を二分する重要な政治的事件だったと捉える必要がある。何よりも、雄略の逝去の直後にこの事件が発生したことは、雄略の強権がその人格と不可分に結びついたものであり、制度的な裏づけが十分ではなかったことを物語る。清寧は乱の鎮圧には成功するものの、后妃も子もないままに、その死によって允恭系王統は男系では断絶する。

記紀は、清寧逝去に前後して、雄略が殺害した市辺押磐王(いちのべのおしはのみこ)の妹、忍海女王(おしぬみのひめみこ)(飯豊青女王(いひどよのあおのひめみこ)とも)が一時的に統治を代行したことを記す。忍海女王の統治は、断絶した允恭系王統に代わり、仁徳系の王族の復権を示すと共に、それは事実上の女帝の出現でもあった。『日本書紀』は、彼女の王宮を葛城忍海高木角刺宮(かつらぎのおしぬみのたかきのつぬさしのみや)と記す。彼女の母は、葛城氏の出自である(葦田宿禰の娘、黒媛)。

さらに、記紀は、彼女を継いで即位する顕宗(弘計(をけ))、仁賢(億計(おけ))の二人の兄弟(市辺押磐王の遺児)が潜伏先の播磨で見出され、復権したことを記すが、彼らを保護したのは、忍海部造細目(おしぬみべのみやつこほそめ)という人物である。

播磨潜伏が事実かどうかは別にして、この伝承は忍海女王と忍海の王宮を舞台として成立した可能性が高い(図5)。つまり允恭系王統の断絶は、仁徳系王統と共に、葛城氏の復権をも意味したことになる。雄略が弾圧した仁徳系王統と葛城氏は、允恭系王統の断絶と共に、そろって復権を遂げたのであり、その専制的性格を過大に評価することはできない。

おわりに

ここでは、記紀の王名から推定できる王宮のあり方と、記紀にみえる王族、豪族の伝承の分析を通じて、5世紀の中央支配権力を流動的で分節的な状態と捉え、それに対応して、地域社会もまた、鉄をはじめとする先進資財の入手をなかば自立的な状態で行っていたことを論じた。5世紀を通じて倭王の権力は強大化し、少なくとも中央支配権力の統合は進むが、制度的な裏づけを欠き、5世紀末、清寧逝去を迎えてもなお、不安定な状況にあったことと結論づけた。

こうした状態は、復権した仁徳系王統もまた、打開することはできなかつたとみられる。仁賢の子、武烈は、子を残すことなく逝去し、仁徳系王統もまた、男系では断絶するからである。その後、即位する継体は父を近江、母を越の出自とする事実上の地域勢力であったが、その継体新王統の下で、新たに支配制度の整備が進む。王統の統一と真の意味での専制的支配権力が成立するのは、6世紀以降のことと考えられる。

【主要参考文献】

- 大平聡『日本古代の王権と国家』青史出版、2020年
川口勝康「五世紀の大王と王統譜を探る」同氏他『巨大古墳と倭の五王』青木書店、1981年
北村優季「記紀にみえる日本古代の宮号」『山形大学歴史・地理・人類学論集』4、2003年
鬼頭清明「磐余の諸宮とその前後」山中一郎他『新版古代の日本5 近畿1』角川書店、1992年
河内春人『倭の五王』中公新書、2018年
鈴木靖民『倭国史の展開と東アジア』岩波書店、2012年
仁藤敦史『古代王権と支配構造』吉川弘文館、2012年
坂靖・青柳泰介『シリーズ遺跡を学ぶ七九 葛城の王都 南郷遺跡群』新泉社、2011年
山尾幸久『日本古代王権形成史論』岩波書店、1983年
吉田晶『吉備古代史の展開』塙書房、1995年
拙著『国家形成期の王宮と地域社会——記紀・風土記の再解釈』塙書房、2019年
拙著『倭国 古代国家への道』講談社現代新書、2021年
拙稿「日本古代における伝承と史実の間——オケ・ヲケ伝承を手がかりに——」桜井市纏向学研究センター編『纏向学の最前線——桜井市纏向学研究センター設立10周年記念論文集——』2022年

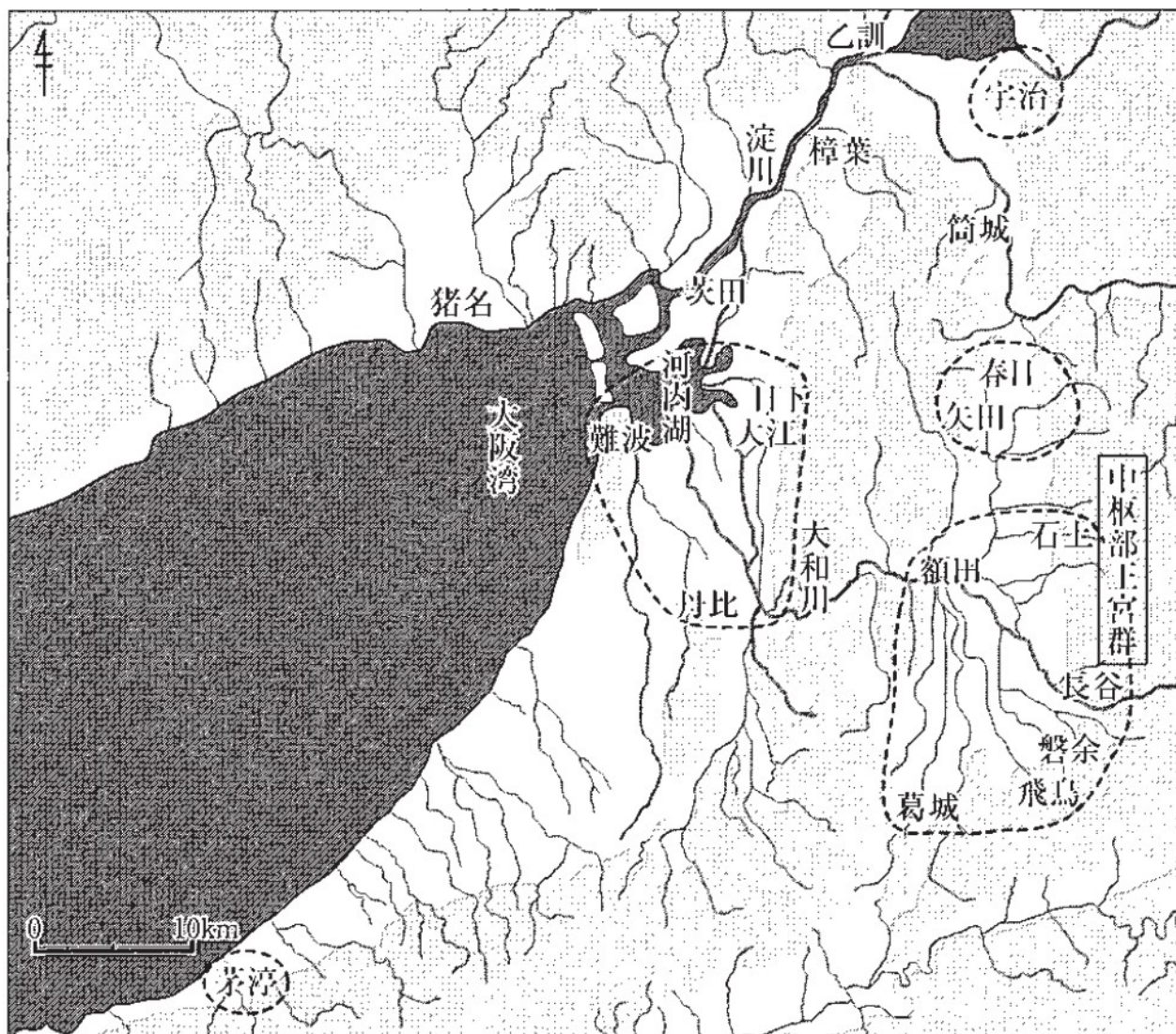


図1 5・6世紀の主要王宮群（破線内は5世紀に遡る王宮群）

地域 1	地域 2	名号：応神～宣化朝	名号：欽明～厩戸王所生
倭王権中枢部 奈良盆地南部 他	平群 葛城 高市 山辺 磯城 十市	<u>額田</u> <u>朝妻</u> 忍海 大原 藤原 輕 境 八鈞 <u>橘</u> 勾 檜隈 市辺 星川 <u>穴穂</u> <u>鷦鷯</u> 忍坂 <u>長谷</u> 出雲 <u>神前</u> <u>白髪</u> (白髪部)	<u>葛城</u> 当麻 片岡 <u>蘇我</u> <u>桜井</u> <u>厩</u> (戸) 豊浦 久米 小治田 <u>石上</u> 他田 <u>笠縫</u> 池辺 竹田
周縁部 1 奈良盆地北部	添	<u>矢田</u> 御馬 <u>春日</u> <u>高橋</u> <u>山田</u>	<u>倉</u> 大宅 佐富
周縁部 2 山背南部	宇治 久世 未詳	<u>宇治</u>	栗隈 殖栗 <u>山背</u> (または河内国石川郡か)
周縁部 3 河内(摂津を 含む。括弧内 は郡名)	北河内 摂津 中河内 南河内	田宮(交野) <u>茨田</u> (茨田) 住吉(住吉) <u>難波</u> 大江 <u>日下</u> (以上、河内) 丹比(丹比) 田井(志紀) 澩来田(石川)	肩野 大伴(河内・石川か) 手島 弓削(若江)

表 1 王名に関わる地名の分布(下線はくり返し用いられる名号)

	倭王名	宮号—要素	個別の名代
磐 余	17 履中(大兄去来穂別)	稚桜宮—氏族名	日下部カ(河内・大戸郷、 日下部郷に隣接)
	22 清寧(白髪)	甕栗宮—佳号	白髪部
	※ 26 継体(男大迹)	玉穂宮—佳号	…(新王系のため名代なし)
	※ 31 用明(橘豊日)	池辺双槻宮—地名・ 事物	橘戸 他田舎人他
	※ 30 敏達(他田)	訳語田・幸玉宮—佳号	鷦鷯部
	※ 32 崇峻(泊瀬部稚鷦鷯)	倉梯宮—地名	
長 谷	21 雄略(大泊瀬稚武)	朝倉宮—地名	建部
	25 武烈(小泊瀬稚鷦鷯)	列城宮—事物	鷦鷯部
石 上	20 安康(穴穂)	穴穂宮—地名	穴穂部
	24 仁賢(億計)	広高宮—佳号	…(父の謀殺により逃亡、 独自の名代なし)
	磐坂市辺押磐王	市辺宮—地名	泊瀬部カ(磐坂は泊瀬の地名)

表 2 磐余・長谷・石上の倭王宮

- ・表中の※は6世紀の倭王宮
- ・磐坂市辺押磐王は倭王として扱う

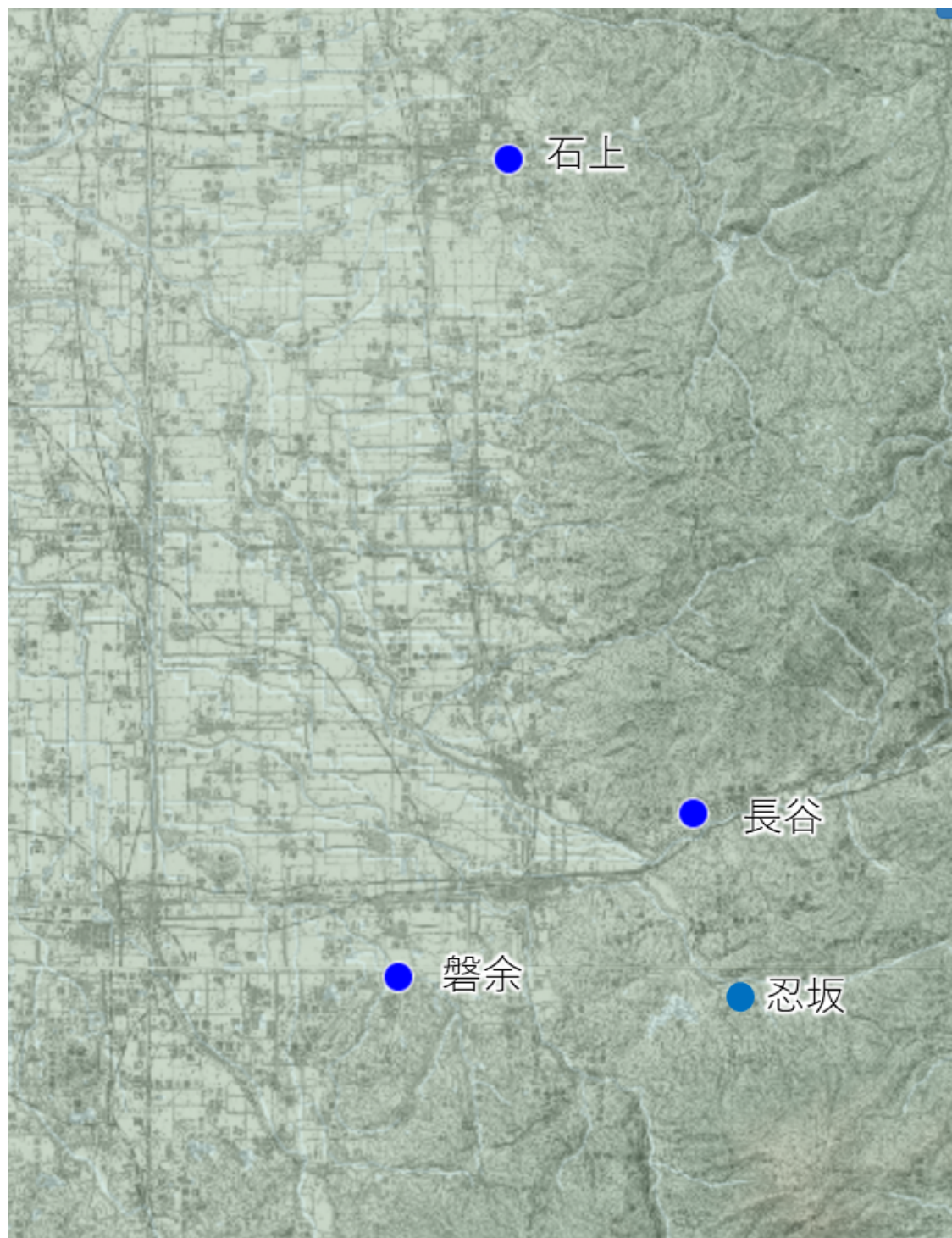


図2 奈良盆地東南部の主要王宮群
ひなたGISより 川だけ地形地図+旧版五万分一地名図

点線の系譜は信頼度が低いことを示す
 傍線の付された人物は不慮の死を遂げた人物
 四角囲いは同母キョウダイ婚

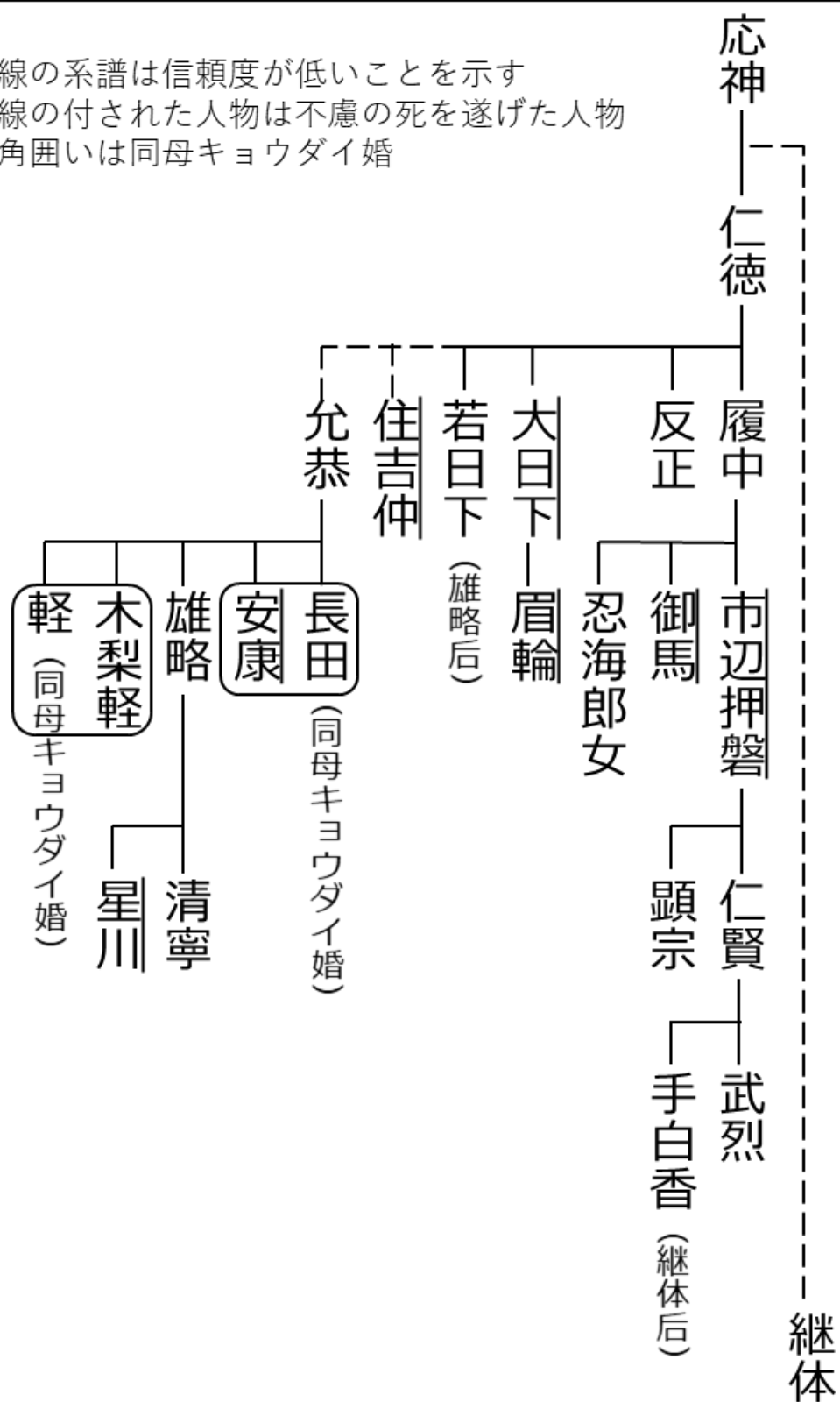


図3 仁徳系と允恭系の対立関係

若狭 徹（わかさ とおる）

明治大学文学部専任教授／日本考古学、古墳時代

Keyword：東国首長・巨大前方後円墳・共立王・渡来人・利益共同体・地域開発・銘文鉄剣・上番制・格差の可視化



〔略歴〕

昭和 37 年（1962）長野県長野市生まれ、群馬県育ち。
明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業
博士（史学）明治大学。第 23 回濱田青陵賞（2010 年）受賞。
群馬県群馬町教育委員会学芸員、高崎市教育委員会文化財保護課長を経て、
平成 29 年（2017）年度より明治大学に着任。

〔主な論著〕

- ・『古墳時代の地域社会復元―三ツ寺 I 遺跡』新泉社、2004 年
- ・『古墳時代の水利社会研究』学生社、2007 年
- ・『もっと知りたいはにわの世界―古墳時代からのメッセージ』東京美術、2009 年
- ・『ビジュアル版 古墳時代ガイドブック』新泉社、2013 年
- ・『東国から読み解く古墳時代』（歴史文化ライブラリー）吉川弘文館、2015 年
- ・『前方後円墳と東国社会』（古代の東国 1）吉川弘文館、2017 年
- ・『埴輪は語る』（ちくま新書）筑摩書房、2021 年
- ・『古墳時代東国の地域経営』吉川弘文館、2021 年
- ・『埴輪―古代の証言者たち』（角川ソフィア文庫）KADOKAWA、2022 年

「倭の五王の時代の東国社会」

はじめに

倭の五王の活動は、5 世紀（古墳時代中期）のできごとであり、彼らの活動を反映した記念物である巨大前方後円墳が百舌鳥・古市古墳群に造営された。その活動の中核は、畿内から西日本にあったことは疑いないが、このとき倭世界の半分を占める広大な東国地域は、蝦夷の盤踞する埴外のエリアだったと考えられがちである。

しかし、はたしてそうであろうか。五王の最後を飾る武は「東は毛人を征すること五五国」と宋に上表したが、それは外交上の言説であって、武力で制圧したとみるべきではない。ここでは、東方のクニグニもまた王権構成の重要なメンバーであり、王権の対外活動の担い手であったことを紹介していきたい。

1. 古墳前期の東国三大古墳

五王の時代の直前、古墳時代前期後半（前方後円墳集成 4 期〔近藤 1992 他〕）には、東国（遠江・信濃以東の国々）にも墳丘長 200m に迫る前方後円墳が登場した。仙台湾

に面した陸奥の雷神山古墳（宮城県名取市・168m）、関東平野最奥部の上毛野に位置する浅間山古墳（群馬県高崎市・172m）、中央高地の甲斐に造営された甲斐銚子塚古墳（山梨県甲府市・169m）である（図1）。それぞれが至近に直径80m内外の大型円墳を従えている。

雷神山古墳は、関東地方の常陸（茨城県）北部の那珂湊から北上する往時の太平洋航路の終着地に位置する。被葬者は、関東・東北の太平洋岸を結んだ津を管理した首長像を想定できる。

甲斐銚子塚古墳の位置は、太平洋岸—中央高地—日本海側の中継地として重要である。長大な竪穴式石室・葺石・円筒埴輪・木製立物・三角縁神獣鏡を含む5面の鏡・車輪石等を備え、前期において畿内型の古墳様式を整えた北限の古墳として知られる。ところで記紀では、景行天皇の王子ヤマトタケルが東征を終え、休息する場として甲斐「酒折宮」が記される。王権の拠点が甲府盆地に置かれるのは銚子塚古墳の在り方とも整合する。筆者は、ヤマトタケル東征伝承とは、古墳前期における畿内と東方世界の「政治・経済ネットワーク」（図3）の構築プロセスを説話化したものとする（若狭2022）。

浅間山古墳は、南・東関東、信濃・越後（日本海側）からの陸上交通の結節点を占めるとともに、東京湾へのアクセスルートである「荒川・利根川水運」の最上流の津（倉賀野の津）に接する（図3）。同古墳は、大王墓の可能性のある奈良県佐紀陵山古墳（207m、4世紀中葉）の墳丘規格を採用（図2・5）し、奈良盆地南東部のオオヤマト古墳群から王陵を奈良盆地北部に移した「佐紀政権」と関係を取り結んだことが分かる。葺石・埴輪を備え、広大な二重周濠を巡らし、中堤にまで葺石を施工する念入りな造りである。

畿内の前方後円墳における二重周濠は、古市古墳群の初出墳で大王墓の可能性もある津堂城山古墳（大阪府藤井寺市・208m・4世紀後半）で確立したが、浅間山古墳の時期は、同古墳より下ることはないと考えられる（図13）。つまり国内でも最も早く二重周濠を備えた古墳の一群としてよい。佐紀陵山型の前方後円墳は、京都府京丹後市網野銚子山古墳（200m、丹後半島の津に存在）、兵庫県神戸市五色塚古墳（194m、淡路海峡を押さえる位置にある）など水上交通の要衝に位置することから、倭王権の朝鮮半島との対外活動にかかわるとされている（岸本2010）。浅間山古墳の成立も、関東平野内陸から東京湾を結び、そこから東西に展開する長大な水上交通との関係で理解できよう。

上記のように古墳時代前期後半において、東国をカバーした水上交通と陸上交通のネットワークが完成している（図3）。そこを、さまざまなモノが行き交ったことは、駿河から広がった大廓式壺（に入った物資）の流通状況からも明らかである（図4）。

逆に言えば、前方後円墳システムの展開は、これまで言われてきたヤマトを核とした祭祀・政治連合の紐帯の広がりであるとともに、「経済システム・安全保障システム」

の広がりでもあったと言える。各地の首長たちは、倭王権の軍事力に屈したのではなく、東西南北を行き交う物資の獲得に有利な経済連合に進んで加入したと考えるのが妥当である（若狭 2021 a）。

2. 中期前半の東国

（1）巨大古墳の登場

上毛野では、5 世紀初頭まで、利根川を境とした東西域で大型古墳が並立した（図 8）が、5 世紀前半（前方後円墳集成 5 期）には、ついに墳長 210m の太田天神山古墳が築造されるに至った（図 6-1）。ちなみに、前代の浅間山古墳は佐紀陵山型の墳丘規格を採用したが、太田天神山古墳では大阪府古市古墳群の墳丘規格に転じており、当地の勢力はその時々によりイニシアチブをとった王権中枢と結んでいたことが明らかである（図 5）。

太田天神山古墳は二重周濠を巡らし、新しい形象埴輪（水鳥形埴輪）や B 種横刷毛技法の円筒埴輪をもち、倭政権中枢にのみ許された長持形石棺を装備する。関東・東北には中期前半に同石棺を模した「類長持形石棺」が広がるが、東国の真正な長持形石棺は本古墳および、隣接した伊勢崎市お富士山古墳（125m）（図 6-2）のみである。なお、太田天神山古墳築造の際には、上毛野から北武蔵にかけて（お富士山古墳を除いて）大型前方後円墳が存在しなくなる（図 8）。したがって太田天神山古墳の被葬者は、一帯の諸豪族が推戴した「共立王」であると考えられる（土生田 2008）。

ところで共立の理由とはなんだろうか。その範囲は既存の広域農業用水圏を超越しており、「治水王」などの性格は考えにくい。筆者は、本古墳築造後の上毛野社会において朝鮮半島系文物が出現することから、この時期に東国と東アジアとの外交チャンネルが成立したことを背景に読み取りたい。すなわち、上毛野地域が倭王権から委任され、初めて対外活動を行うにあたり代表者を選任したことがその理由であると考え。地域社会にとって、朝鮮半島の人材と先進技術を獲得し、経営刷新を行うことは絶大な目標であった。そのため、利益共同体を結成し、その代表者を選任したと推論するのである。

こうした動きは東国各所でみられ、常陸では霞ヶ浦沿岸勢力の共立墓として石岡市舟塚山古墳（186m）が、下総（千葉県北部）では香取市三之分目大塚山古墳（123m）が、上総（千葉県南部）では木更津市高柳銚子塚古墳（142m）が築造された（図 8）。

（2）文献からみた東国豪族

『日本書紀』においては、神功紀以降、外交記事が増えることが知られているが、上毛野地域の豪族である上毛野氏の始祖伝承が、神功・応神・仁徳紀に集中する。神功 49 年には荒田別と鹿我別が将軍となり、百済と合同で新羅を討ち、伽耶の 7 国を平定したのちに百済王並びに世子と会見したとある。応神 15 年には、倭に馬生産や経典をもたら

した百済人学者である阿直岐（百済からの派遣官）の推薦を受け、新たに王仁を招くにあたり、荒田別と巫別が遣わされた。仁徳 53 年には、竹葉瀬と弟の田道が朝貢を欠いた新羅を詰問するために派遣された。このとき田道は精兵を率いて背いた新羅を討ち、四邑の民を連れ帰ったと記される。この時期の外交記事に関して慎重な取り扱いが必要（仁藤 2018）であることは無論であるが、これらは東国豪族の対外活動の記憶として棄却することができない記事である。しかも対新羅戦の将軍、伽耶地域の復興に関わる外交の全権委任、百済人学者の招聘にかかる外交特使という重要な職務を帯びる。新羅人集団の随伴伝承もまた空論とすべきではない。

なお、上毛野以外の東国豪族では、『常陸国風土記』行方郡条に、神功皇后の時に 3 度も韓に遣わされたという「古津比古」の伝承が載る。

（3）渡来文物の出土と渡来人の移入

上毛野では多くの朝鮮半島系文物が出土している。榛名山東南麓に濃密であり、方形積石塚、韓式系軟質土器、馬埋葬土壇（馬遺体＋半島製馬具）、金製垂飾付耳飾、鉄鐸等の文化複合がみられる（図 7）。積石塚は 20 例以上が知られ、3 ランク程度の階層があることから、渡来人は一定数の集団として存在したことが明らかである。

この地の考古学的成果から、渡来人は貯水池築造などの農業水利事業、馬生産、鉄器生産などに関わったとみられる（若狭 2007）。ストロンチウムや酸素同位体の分析結果によって東国からヤマトに馬が送られたことが判明しており（青柳・丸山 2017）。王権は東国と馬の生産委託を結び、プレ東山道ルートを通じて馬を搬送した。こうした考古学的状況は踏まえると、記紀の一連の記載はある程度の実態を背後に認める必要がある。

ところで、『紀』の同時期の記事で外交に関わる人物として葛城襲津彦が知られる。襲津彦は新羅の人質を送還する特使として半島に派遣されたが、欺かれたために新羅の城を攻めて捕虜を連れ帰り、大和の桑原・佐麻・高宮・忍海の四邑に配置したとする。これは上毛野氏祖の新羅四邑民の随伴伝承と類似する。襲津彦は大王の外戚となる葛城氏の始祖に位置付けられる。葛城の諸豪族の墓所である大和盆地南西部の馬見・葛城古墳群には前期後半から中期前半の 200m を超える巨大前方後円墳が林立する（図 2）。

葛城南西部の南郷遺跡群では、豪族の祭殿・居館・導水祭祀場・渡来人技術者の工房などが関連して見つかり、寺口忍海古墳群などの渡来文物を伴う群集墳も知られる。長持形石棺を備えた室宮山古墳（238m）は、ここで活動した首長が眠る奥津城と目される。

大和の葛城と上毛野における、5 世紀前半の長持形石棺を装備した 200m 級前方後円墳の存在、その後の渡来人集住という考古学的現象、文献に見る訪韓伝承と渡来人の随伴伝承（四邑配置という類似性）は、整合的に見る必要がある。これらのことから、ヤマトや西日本の豪族と同様に、東国豪族が王権の主要メンバーとして対外活動を担った

蓋然性はひじょうに高いと言える。

なお、上毛野勢力が対外活動を行うには、利根川・荒川水運を使って東京湾にアクセスし、湾岸豪族が管掌する津において外洋船・必要物資・水手・水先案内人などを調達する必要がある。こうした仕組みは、先に示した古墳前期に構築された経済ネットワークを発展する形で営まれただろう。なお筆者は、この時期に上毛野勢力との関係で日本海側の津の連携が志向され、日本海ルートも合わせて複線的に強化されたと想像している（若狭 2020）。

3. 中期中葉の東国

（1）上総の優勢と王権用務の輪番制

上毛野では、中期中葉（集成 6 期）には前方後円墳が不明確となる（図 8）。そして、中期後半（集成 7・8 期）になると一転して多数の 100m 級前方後円墳が林立するようになる。巨大前方後円墳が終焉したのは、地域の王を共立するシステムが解消したことを示すが、そこには二つの理由が考えられる。

一つは内的要因である。渡来技術移入のために結集し、共立王を推戴した諸豪族の利益共同体は、外交ルートを獲得したことで目的を達し、中期後半には解体した。その後は、各豪族が渡来人を配下に組み込み、新たな産業振興にシフトしている（図 9）。

もう一つの理由は外的なもので、王権側の政治的事情である。たとえば上総では、上毛野・常陸に遅れ、中期中葉（集成 6～7 期）になって共立王の墓である富津市内裏塚古墳（148m）が成立している（図 8・10）。本墳は、百舌鳥古墳群の上石津ミサンザイ古墳の相似墳とされ、金銅製胡籙など外来遺物を保有する。近隣で畑沢埴輪窯が運営され、関東で馬形埴輪や人物埴輪を採用した最も古い古墳として知られる。また、小糸川河口の砂堤上の臨海型古墳として設計されており、百舌鳥古墳群の立地の影響が考えられる。また、この時期以降、上総でも渡来文物が増加することが知られる（図 10）。

なお、常陸でも舟塚山古墳以降、中期中葉の前方後円墳は低調である（図 8）。上毛野や常陸の古墳が衰退したなかで、中期中葉の上総の古墳が充実するのはなぜであろうか。倭王権が豪族に対外活動を委任する場合、各勢力の損耗も踏まえて輪番に委任した可能性が考えられよう。上毛野では、特に太田天神山古墳の近隣においてその後の古墳が低調になる。唯一の大型墳である太田市鶴山古墳（102m、5 世紀後半）では、複数の甲冑とともに最古級の鎧（半島製）を伴い、頭骨を欠いた改葬された遺体が葬られている。しかも葺石や埴輪を装備しない未完成墳（葬送儀礼が未完）であり、被葬者が外地で戦死し、帰葬されたと推定される。こうした勢力の損耗もまた、地域の動向を左右したと考える（若狭 2017）。

このような各地域の損耗・趨勢を踏まえたうえで、中期前半の港湾利用や港湾整備によって急速に経済力を増した上総地域に、その後の対外活動が委任されたのであろう。

また房総半島先端部に盤踞し、海蝕洞窟に舟葬を行う（古墳を造らない文化の）海人集団が存在したが、彼らはこの時期に甲冑や馬具など古墳副葬品と同等の品を副葬するに至る（館山市大寺山洞窟遺跡）。これは對外活動の活発化にともなって、海事に精通した海人集団を「海部」として編成した実態を反映したものと考えてよい。

（２）祇園大塚山古墳の充実

内裏塚古墳の後は上総でも共立は分解したが、一帯の優勢な状況は続き、木更津市祇園大塚山古墳（115m）、市原市姉崎二子塚古墳（116m）が築造されている。二子塚古墳では、銀製垂飾付耳飾など渡来文物が確認される。祇園大塚山古墳では、金銅製眉庇付冑・小札甲、銀製垂飾付耳飾、同型鏡（面径 30.4cm の画文帯仏獣鏡）などが出土している（図 10）。金銅製甲冑は、大阪府大仙陵（仁徳陵）古墳の前方部石室出土例と本例の 2 例が知られるのみであり、最上級の威信財である。王権に高く信任された首長の象徴的器物と性格づけられる（橋本 2013）。また鏡は、倭の五王時代後半期の政策として配布された同型鏡群のなかでも古い時期に配布され、なおかつ最大級のものである（辻田 2019）。甲冑と合わせて、この被葬者への王権の厚遇が看取される。

この頃の中型円墳（市原市稲荷台 1 号墳、28m）から出土したのが、「王賜」銘鉄剣である（図 11）。これをもって王権が円墳被葬者層を掌握したとする見方があり、同型鏡がこの頃から中型墳に広がることも合致する。ただし、祇園大塚山のような大型前方後円墳の被葬者と中型円墳被葬者を王権膝下の機構に別個に組み込んだのか、地域内の上下関係を保持する形で編成したのかは、なお検討が必要である。

4. 中期後半の東国

（１）新開地域に現れた前方後円墳

中期後半になると上毛野西部に多数の大型墳が現れる。集成 7 期では高崎市に上並榎稲荷山（120m）、不動山（94m）、岩鼻二子山（115m）、同 8 期でも高崎市に保渡田古墳群（井出二子山 108m、八幡塚 96m、薬師塚 105m）、平塚（105m）が林立し、古市古墳群を除き、国内で大型墳が最も集中する。ここでは、渡来人を配下に編成した旺盛な地域開発が展開されている。大規模な首長居館（三ツ寺 I 遺跡・北谷遺跡）を営み、農業水利刷新による農地拡大や馬生産を加速させたことが知られる（若狭 2007）。

この地域では、大型墳を営む同族を配し、舟形石棺と埴輪規格、人物埴輪の数量で序列化された首長連合を構築している（図 9）。また井出二子山古墳の副葬品には新羅・伽耶系文物が複数見られるとともに、連合する首長たちの配下には渡来人が数次にわたって組み込まれる（若狭 2021b）。ことから、東アジアとの外交コネクションを続けて有していたと推定される。

（２）上番して王権を支えた東国首長一族

この頃、優勢な上毛野の連合体を抑えるように、利根川・荒川水運の中継地〔埼玉の

津（万葉集東歌に登場）〕に出現したのが埼玉稲荷山古墳（120m）である。初葬者の埋葬施設は未発見だが、第2埋葬施設（礫槨）に葬られたのが、「辛亥」銘鉄剣を保有した人物である。銘文は、「杖刀人首」としてワカタケル（雄略＝武）大王の天下をたすけたオワケが、上祖のオオヒコから8代にわたる系譜を刻んで、その奉事根源を述べたものである（図12）。本鉄剣はオーダーメイドであり、既製品である「王賜」銘鉄剣を下賜された稲荷台1号墳被葬者とは質的に異なる。また同型鏡（画文帯神獣鏡）や龍文透か彫帯金具を副葬するなど、上位首長の装備を備える。ただし、武具や馬具は最高ランクから一段落ちた（軍事色が強い被葬者に伴う）セットとなる（内山2013）。

この被葬者の理解には諸説あるが、初葬者（造墓者＝地域首長）の子弟としてワカタケル大王の王宮に上番して活動し、帰郷後に追葬された人物としてよいであろう（田中2013など）。なお、この時期最大の前方向後円墳は古市古墳群の岡ミサンザイ古墳（242m）であるが、他の前方向後円墳は100m級に下降しており、百舌鳥古墳群の造墓は終わっている（図2・13）。そうしたなかで埼玉稲荷山古墳（120m）は、全国10位以内に入る。かかる規模の古墳を築いた首長の子弟が、武官の長として雄略の王宮に仕えたとしても違和感はない。文献記事では、雄略が伝統的な豪族（葛城氏、吉備上道氏・下道氏）を打倒する一方で、地方豪族や渡来人を配下に置いている。このことは、中期後半に地方に大型前方向後円墳が増加すること、武蔵と肥後に銘文刀剣（後者は熊本県江田船山古墳でワカタケル大王に典曹人として仕えたと記す）が存在する現象とも矛盾しない。

5. 中期における古墳規模の段階的变化とその理由

王権中枢の百舌鳥・古市古墳群においては下記の4つの段階が認められ、東国の古墳のあり方が連動する（図13）。

○1段階（集成4・5期）

古市古墳群に津堂城山古墳が成立し、仲津山古墳で300mに迫る。百舌鳥古墳群に上石津ミサンザイ古墳が築造され300mを超える。一方、畿内の佐紀古墳群、馬見・葛城古墳群、吉備、上毛野にも200mを超える巨大古墳が存在する。

○2段階（集成6期）

古市古墳群に突出した規模の菅田御廟山古墳（420m）が成立する。一方、上毛野・常陸においては大型墳が低調化する。上総や日向の前方向後円墳が大型化する。

○3段階（集成7期）

百舌鳥古墳群に大仙陵古墳（525m）が築かれ、規模はピークに達する。馬見・葛城古墳群では巨大古墳が見られなくなる。佐紀古墳群も終焉に向かう。東国でも前方向後円墳は100m前後に小型化する。

○4段階（集成8期）

百舌鳥古墳群での造墓は停止する。古市古墳群では岡ミサンザイ古墳（242m）を最後に 200m級は終わり、続く前方後円墳は 100m級に下降して終焉する。西国でも巨大古墳は築かれない。東国・九州の豪族が上番を示す銘文刀剣を保持する。

こうした考古学的状況と文献記事を照合させると、以下の所見が成り立つと考える。

ア．古墳規模と渡来文物の移入からみれば、1 段階に相当する対外活動（高句麗・新羅との闘い〔広開土王碑〕）においては、畿内・西国だけではなく東国豪族の参加も推定できる。

イ．2・3 段階に百舌鳥・古市古墳群以外の巨大古墳の数が減じていくことと、倭隋等 13 人への將軍号除正（珍の遣使）、臣下 23 人への軍郡号除正（済の遣使）の関係が対応する。倭における府官制的秩序（鈴木 2002）の採用は、墳墓築造競争に象徴される緩やかな豪族連合体制を改変させ、大王以外の豪族層を外的秩序によって下位に秩序づけることに成功したとみられる。

ウ．つまり五王による宋への遣使は、東アジア秩序への対応であるとともに、倭内部での序列構築を大きな目的としていた可能性が高い。

エ．4 段階において、巨大前方後円墳は古市古墳群だけとなることと、雄略による吉備氏・葛城氏の打倒伝承が対応する。2・3 段階で進んだ秩序形成の障害となる最後の旧勢力が排除されたのである。地方における 100m級前後の有力前方後円墳の存在と銘文刀剣、同型鏡の配布等のあり方から、地方豪族の上番制度が確立し、大王膝下の官僚組織が整備されたことが分かる。上毛野に 100m級前方後円墳が多出ること、埼玉古墳群の成立、下毛野における摩利支天塚古墳（120m）の出現などから、東国豪族も重要な位置を占めたことが明らかである。

終わりにかえて

以上のように、中期における東国古墳の動静を軸に整理してみると、倭の五王の宋への遣使は、朝鮮半島諸国との関係で有利に立つという外交面とともに、倭国内での豪族間関係の格差を正当化し、固定化する内政面での政策が重要であったとみることができる。それは、考古学的動静を見る限り一時的成功を治めたようだ。

諸豪族の活動時期と死亡の間の経年を考慮すれば、第 2～4 段階の東国の大型前方後円墳被葬者のなかには、珍の遣使で許された將軍号、済の遣使で認められた將軍号や郡太守号を有した者がいた可能性が高いし、4 段階までには上番して大王を左治した者もいたとみて相違なからう。

ただし、その府官制的秩序がそう長く続かなかったのは、5 世紀末から 6 世紀初頭の王統の混乱と継体天皇の登場、継体・安閑期における東西地方豪族の反乱伝承（筑紫の磐井の乱、武蔵国造の乱）をみれば明らかである。またここでは詳しく触れないが、6 世紀前半の古墳規模からみれば、継体の墓である大阪府今城塚古墳（181m）の次の規模

である 150m の前方後円墳を築いた尾張や上毛野の豪族は、継体のきわめて重要な支援勢力であったと考えられる。

また、6 世紀後半になると、小札甲や馬具・装飾付大刀が東国に多く分布し、なかでも上毛野に集中すること、小札甲を着装した表現の武人埴輪（有力首長の武威を表現）が東国の後期古墳に偏在すること、新羅系文物が東国の後期古墳から多く出土すること、東国武人の武勇が後の王朝で語り継がれること（山背大兄王が蘇我入鹿に敗れた際に東国の乳部〔壬生部〕を頼って再起すべきと進言されたこと、聖武天皇の詔で東国武人の勇猛さと王権への貢献が賛美されること）などから、古墳時代後期の外交・軍事もまた東国豪族が多くを担ったことは確実である。東国ははるかヤマトの周縁にあるが、この地の豪族たちは古墳時代を通じて王権のメンバーとして青海を渡り、広範に活動していたのである。

〔参考文献〕

- 青柳泰介・丸山真史編 2017『国家形成期の畿内における馬の飼育と利用に関する基礎的研究』奈良県立橿原考古学研究所
- 内山敏行 2013「将軍山古墳の武器武具」『古代の豪族—将軍山古墳とその時代』埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 岸本直文 2010『史跡で読む日本の歴史 2 古墳の時代』吉川弘文館
- 近藤義郎編 1992『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社
- 鈴木靖民 2002「倭国と東アジア」『日本の時代史 2 倭国と東アジア』吉川弘文館
- 田中史生 2013「倭の五王と列島支配」『岩波講座日本歴史 第 1 巻 原始古代 1』岩波書店
- 辻田淳一郎 2019『鏡の古代史』（角川選書）KADOKAWA
- 仁藤敦史 2018「神功紀外交記事の基礎的考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』211 集
- 橋本達也 2013「祇園大塚山古墳の金銅装眉庇付冑と古墳時代中期の社会」『祇園大塚山古墳と 5 世紀という時代』六一書房
- 土生田純之 2008「古墳時代の実像」『古墳時代の実像』吉川弘文館
- 若狭徹 2007『古墳時代の水利社会研究』学生社
- 若狭徹 2017『前方後円墳と東国社会（古代の東国 1）』吉川弘文館
- 若狭徹 2020「5 世紀の東国と越後・佐渡—日本海沿岸の津と東国豪族の対外活動」『新潟県考古学会 2020 年度秋季シンポジウム研究発表要旨』新潟県考古学会
- 若狭徹 2021 a『古墳時代東国の地域経営』吉川弘文館
- 若狭徹 2021 b「群馬県金井東裏遺跡 1 号男性の研究」『考古学研究』67—2 考古学研究会
- 若狭徹 2022「前方後円墳の社会的機能に関する一考察」『律令制国家の理念と実像』八木書店

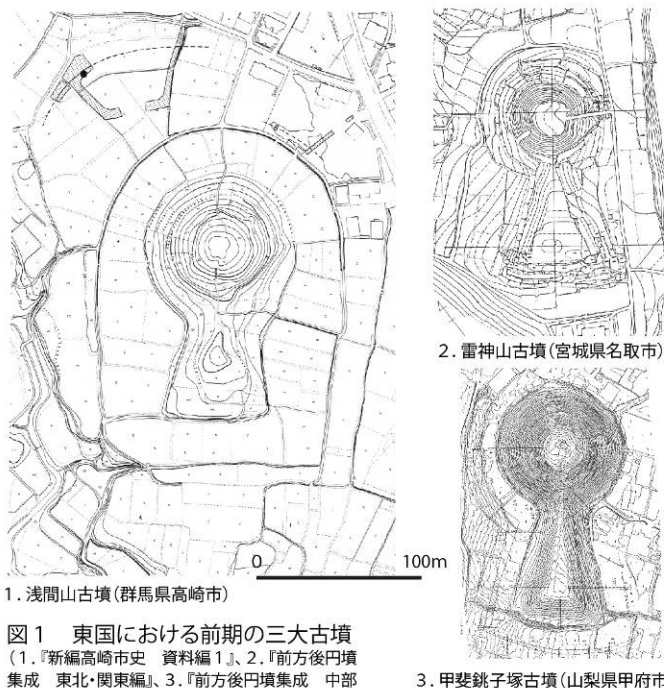


図1 東国における前期の三大古墳
(1.『新編高崎市史 資料編1』、2.『前方後円墳集成 東北・関東編』、3.『前方後円墳集成 中部編』山川出版社より)

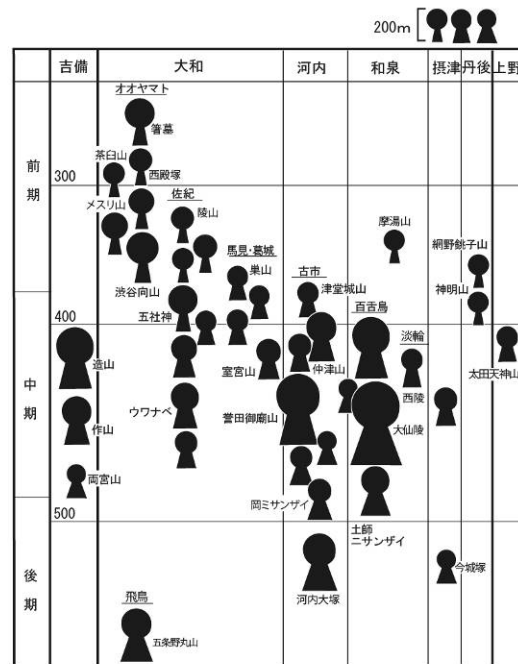


図2 日本の主要な前方後円墳(若狭作成)

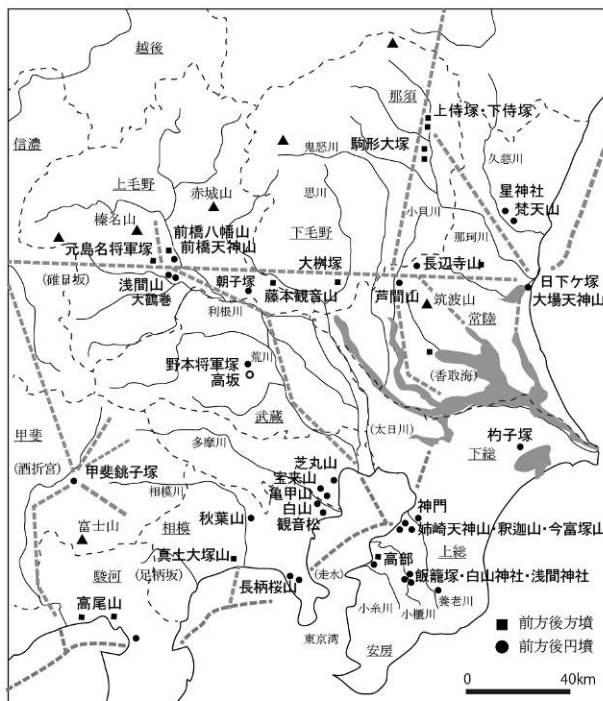


図3 関東の主要前期古墳と交通網(若狭作図)

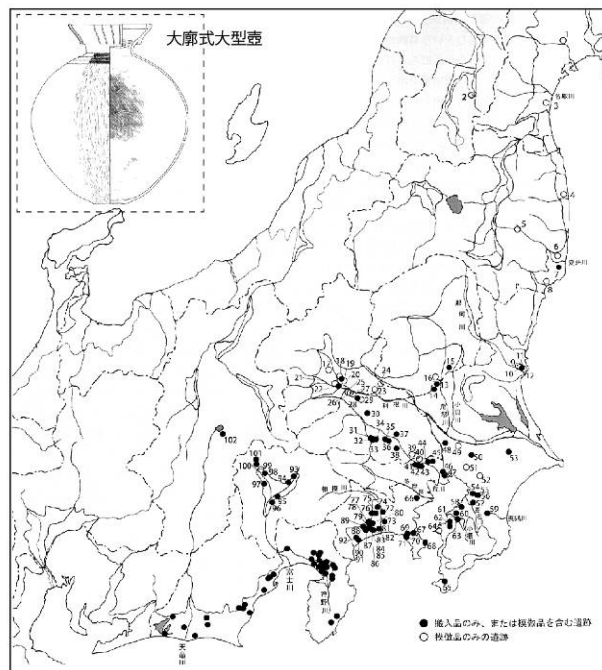


図4 大廓式壺の分布(柳沼賢治2013「大廓式土器の広がり」『駿河における前期古墳の再検討』に加筆)

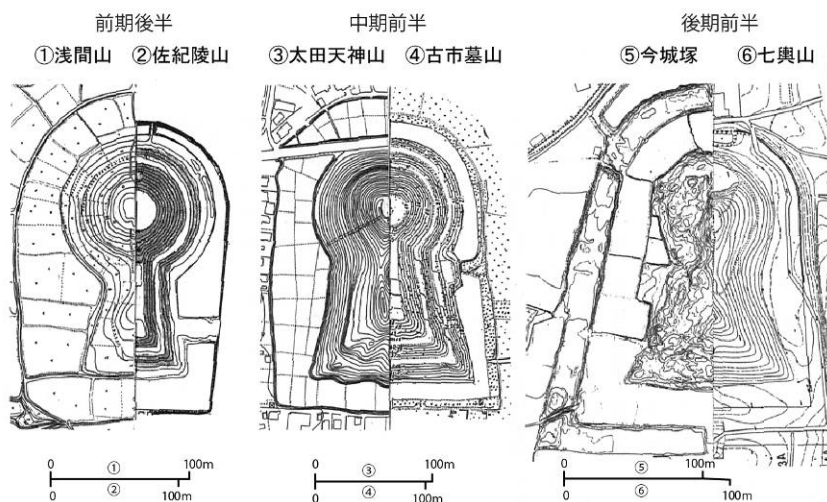


図5 上毛野とヤマトの主要前方後円墳の規格の相似(若狭作図)

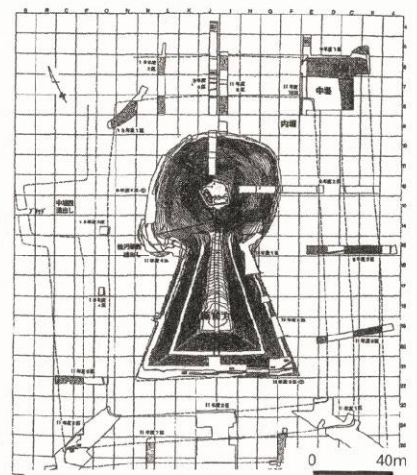


図 11 稲荷台 1 号墳「王賜」銘鉄剣
(市原市教委 1988 『「王賜」銘鉄剣概報』より)

埼玉稲荷山古墳出土鉄剣銘文【読み下し】
(表) 辛亥の年七月中、記す。ヲワケの臣、上祖名はオホヒコ、その兄タカリのスクネ、その兄名はテヨカリワケ、その兄名はタカヒシワケ、その兄名はタサキワケ、その兄名はハデヒ、(裏) その兄名はカサヒヨ、その兄名はヲワケの臣、世々杖刀人の首と為り、奉事し来りて今に至る。ワカタケル大王の寺、シキの宮に在る時、吾天下を左治し、この百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記すなり。



辛亥銘鉄剣



墳丘測量図(前方部盛り土は復元)



画文帯神獣鏡

図 12 埼玉稲荷山古墳(埼玉県立さきたま資料館 1998 『ここまでわかった稲荷山古墳』、埼玉県教委 2007 『武蔵埼玉稲荷山古墳』より。画文帯神獣鏡は文化庁蔵。さきたま史跡の博物館提供)

前方後円墳 集成編年	須恵器 編年	九州	中国	畿内				中部	関東		外交記事・反乱伝承記事等	
		大隅／日向	吉備	淡輪／三嶋	古市	百舌鳥	佐紀	馬見葛城	伊賀／美濃／甲斐	上毛野		上総／常陸／陸奥
4 期		唐仁大塚 150	金蔵山 162 神宮寺 158		津堂城山 208		石塚山 218 五社神 270	島の山 200 巢山 204	昼飯大塚 150 甲斐銚子 塚 169	浅間山 172 別所茶臼 山 165	雷神山 168	369?／百済が倭に七枝刀を贈る(紀) 〔上毛野氏祖・葛城襲津彦らの訪 韓伝承〕(紀)
5 期	TG232				仲津山 290 墓山 225	上石津ミツ ザイ 360	コナベ 204	新木山 200 室宮山 238		白石稲荷 山 150 太田天神 山 210	舟塚山 186 水戸愛宕塚 138	400・404／高句麗と倭の戦争(広 開土王碑) 421／讃が宋に遣使(宋書)
6 期	TK73	女狭穂塚 176 男狭穂塚 176	作山286		誉田御廟 山 425		ウワナベ 265 市庭253	川合大塚 山215	御墓山 188		高柳銚子塚 142	438／珍(讃の弟)遣使。安東將軍・ 倭国王。 <u>倭隋ら13人にも將軍号</u> 443／済遣使。安東將軍・倭国王
7 期	TK216 TK208	横瀬 140		太田茶臼 山 226		大仙陵 525	ヒシャグ 215				内裏塚148	451／済遣使。 <u>臣下23人に軍郡号</u> 。 六国諸軍事・安東將軍 462／興(済の世子)遣使。安東將軍 ・倭国王 〔葛城円大臣・吉備上道臣・下道 臣の滅亡伝承〕(紀)
8 期	TK23 TK47	<u>江田船山</u> (肥後)			岡ミツザイ 242 軽里大塚 190 ボケ山 120				馬塚 142	<u>埼玉稲荷 山(武蔵)</u>		475／高句麗が百済を攻め、漢城が 陥落・熊津へ遷都(紀・三国史記) 478／武(興の弟)上表。六国諸軍 事・安東大將軍・倭王 〔星川王子の乱(紀)、弘計・億計王 の発見伝承(記紀・風土記)〕

図 13 前期末から中期の巨大古墳の盛衰と外交等記事(『前方後円墳集成』山川出版社、『古墳時代の考古学2』同成社等から作成)

※畿内は墳長 200m 前後以上、畿内以外は同 150m 前後以上の古墳のみを掲載した。なお畿内 8 期での急速な小型化を示すため、古市古墳群のボケ山古墳のみ 100m 前後のものを記載した。アンダーバーは銘文刀剣出土古墳である。

濱田耕作と『通論考古学』の百年

『通論考古学』という本があります。この本は濱田耕作（号…青陵）が、岸和田市制施行と同じ年の大正十一年（一九二二）、今から約百年前に刊行した古典的存在の本ですが、実は今でも大学で日本考古学を学ぶものにとって必ず触れるバイブル的な存在の本なのです。

濱田耕作の生家、濱田家は岸和田藩岡部家の家臣で、耕作はその長男に生まれ、岸和田の私塾、豫章館（よしようかん）などで学びました。

濱田は府立大阪尋常中学校（現…府立北野高等学校）に入学しましたが、友達をかばい教師にたてつittedことで放校処分となり、東京府に渡り早稲田中学校（現…早稲田中・高等学校）に転校、のちに東京帝国大学史学科を卒業しました。

東京帝国大学卒業後、ヨーロッパ留学で考古学を学び、帰国後の大正五（一九一六）年に京都帝国大学教授となり、京都帝国大学考古学研究室を開設。大正七（一九一八）年には文学博士の学位を授与されています。

濱田は日本で初めて大学機関で考古学講座を開き、科学的な考古学を確立した、日本考古学の父と呼ばれる人物です。濱田の学問領域は国内にとどまらず、中国や朝鮮の発掘調査も指導し、また美術史・建築史・民俗学など多岐にわたりました。

その濱田の主な著書に『通論考古学』があるのです。濱田はこの本の中で「考古学は過去人類の物質的遺物（に拠り人類の過去）を研究する学」と考古学を定義しました。これが現在でも日本考古学の基本理念となっています。濱田の学問の凄い点は対象を「過去人類の」とだけ定め、いつからいつまで、と時代を定めなかった点です。これが各時代の広い研究を生み出し、現在の日本考古学の幅広さを生み出しました。旧石器時代から近現代とここまで広い範囲をその研究対象にしているのは、実は世界中でも日本考古学だけと言ってよいのではないのでしょうか。

また濱田は学問に対する思想的なバイアスを排除しました。日本のみならず世界各国で歴史学や考古学は、イデオロギーや民族、国家の起源に都合の良い歴史的根拠に使われる傾向がありますが、濱田の学問にはそういった傾向は非常に少なく、事実に基づき研究を進めるといふ、今でいえば当たり前の研究姿勢を貫きました。皇国史観が強かった日本において、歴史的、学問的な事実を話すことには、私たちが想像できないほどの勇気が必要とした時代でした。

この濱田が著した『通論考古学』とその研究姿勢が、百年後の現在の考古学研究にも息づいているのです。

岸和田市制記念『岸和田要鑑』という約百年前に刊行された本があります。当時の岸和田を代表する偉人の正装写真が掲載されています。しかし、そこにはなぜか煙草を持った普段着の濱田の肖像が掲載されているのです（右下）。格式・形式に拘らない濱田らしい写真です。考古学は岸和田市制施行当時、まだまだ認知度も低かった学問です。その偉人として取り上げた岸和田市の先見性に驚くと共に、岸和田が輩出した偉人として濱田耕作を知ってほしいと思います。

